

---

# 世界はスベテそのように

河村 和

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

世界はスベテそのように

### 【Nコード】

N84560

### 【作者名】

河村 和

### 【あらすじ】

ある少女の日常が一通の手紙から崩れていく。

賑やかな雨、毛布に包まれた体は温かく心地よい。

ざあざあど叩きつける音は眠気を徐々に洗い流すようだ。

目覚めとともに見える景色は灰色で、昼夜の区別がつかなかった。食道のスツとした空気の感じが空腹を伝えてきている。

昨日からなにも食べていないような気がする。

思い出せない。

丸まった体を伸ばし、毛布から抜け出す、湿気交じりの空気は少し冷たかった。

寢床に座り込み、ぼうつとしている。

階段を降りる靴の音が聞こえてきた。

「おはよう。おなか、空いてるでしょう」

音の主は、私にはわかっていて、といった口ぶりだ。

そう、彼女はなんでも知っている。少なくともこの時間の私のことは。

私の目の前にミルクをトンと置く。

私の少し右に座り、少しづつミルクを飲む私を彼女はずっと見ている。

今日も彼女は正装でピツシリ固めている。

まるで高級バーのバーテンのように。

部屋に入ったことがあるが、何着も持っているようだ。

「変わらないね」

彼女の独り言はいつものことだ。私には返せる言葉がない。

「どんな気持ちなのか知りたいな」

無理な相談、願うのは自由だ。

いつも賑やかな彼女が、今日はどこか寂しげに見える。雨のせいだろうか？

しばらくの沈黙、居心地は悪くない。

私がミルクを飲み終わると同時に、沈黙は破られた。

「夕方にまた来る」

彼女はミルクの容器を奪い取りながらそう言った。

立ち上がり、私に背を向けて歩き出す。

「じゃあね」

少し振り向いて、開いた右手を振りながら彼女は呟いた。

さあさあ、さあさあ、雨の音が大きくなったような気がした。

目覚ましの暴れまわる音、予定された乱痴気騒ぎ。

「ん……」

布団の中から手探りでそれを捕まえ、黙らせる。

「わかってるんだ」

そう、もう少しまどろんでいられることも。

それが本当にもうすこしだってことも。

ベッドの上から毛布を蹴り出して、冷たい空気を感じる。

羽毛布団もついでに投げてしまえ。

猫のように丸くなる、まだ温かい私の体。

温かったお風呂が徐々に冷たくなっていくような感覚。

今日は水曜日、雨が降っているから。

かすかにパチパチと水玉のはじける音が聞こえる。

眠気の抜け切らない私は、胡座をかくような格好で雨の音を聞いている。

朝のひんやりと雨のしっとりがいい感じだ。

「こんな日は一日こうしていたいな」

呟く。

小さな願い。

儚く。

ベッドから飛び降り、背伸びをする。

こんな日はシャワーを浴びないのもいいかもしれない。

わしゃわしゃと髪を弄りながら洗面台へ。

まずは歯磨きから、しゃしゃこと口内から脳髓へ。

響き渡る音は一定のリズムでやさしいノックを繰り返す。

五分ほどそうしていただろうか、時間の感覚はほとんどない。

口を濯いで洗顔開始。

鏡を見るといつも、自分の顔じゃないような気持ちになる。

コンタクトをつけ、手を拭いたら、次は爆発した髪だ。

腰の少し上ほどまで伸びた髪に櫛を入れ、私の目が覚める。

寝卷きを華麗に脱ぎ捨て、今日の服を選ぶ。

選ぶといってもズボンの生地の違いくらいしかない。

もっぱらコットンのタートルネック、下はジーンズ。下着も、ブ

ラもスポーティで単純な物。

色は、もちろん黒だ。

ベッドの上に投げられた寝卷きを畳む。

この寝卷きは探すのに苦労した。

袖口に赤いラインの装飾以外は真っ黒というシンプルなものなの

だけだ。

畳み終わったそれを枕元に置いて、今日の準備は終了。

フロアリングの冷たさを味わいながら玄関へ。

靴は二足しかもっていない。

仕事用とあまり使わないプライベート用。

動きやすく機能的に、それでいて、飾ってもいいような革靴。

両方とも私の趣味に合っていて、それでいて実用的な靴だ。

「いってきます」

誰もいない部屋に挨拶をして階段を下りていく。

いつの間にか雨も止み、しっとりとした空気だけが街に残っていた。

靴の音がカツカツと反響し、音に追いかけてられているみたい。

階段の終わりになにやら段ボール箱が置いてある。

四十センチ四方くらいの大きさだろうか。

中には薄茶色の毛布の中に、真っ黒な猫が入っていた。  
猫は二十センチより少し大きい感じ。

私を見てもすぐにプイッとそっぽを向いて寝なおした。

私の住んでいる場所は職場の喫茶店二階の裏側、住民はマスターと私だけだ。

こんなところに捨てていくなんて……。

「ん、まあ、かわいいし、いっか」

帰ってきたときにいたら、真剣に面倒を見てやろうと思う。

全身真っ黒で目は青く、とても綺麗だったから。

黒に青、か、案外合うものだな。

なんて思いながら職場へ歩き出す。

あったかいミルクとか喜ぶかな、そんなことを考えながら。

それほど田舎でもないけれど都会とも呼べない、そんな特徴のない町の、ある喫茶店。

「アパテイア  
Apateia」

由緒ある教会を改修したかのような石造りの店舗

透明感のある凛とした外観の中に優しさを感じる。

入り口のドアは人が足を挟んでいるような開き方をしていた。

黒い木製のドアには、クローズドの札が架かっている。

ドアに止め木などはない。

体を引きながらドアを目いっぱい押すと、ボトリ、とハーブの入った布袋が落ちた。

開ききったドアの向こう側で犯人が少し残念そうにニヤニヤしている。

彼女はこの店のマスター兼オーナー、九重椋、その人だ。

バーテンダーそのもの、といった格好にエプロンをつけている。

営業中はまったく会話しないこともあるほどきっちりしている。  
たまに崩れる日もあるが。

まあ営業時間外はいつもこんな感じだけれど。

「マスター、最近ないと思ったらこれですか」

「んー、やっぱわかつちゃったかあ。 なっちゃんはするどいね」  
なっちゃん、とは辻堂奈霧。私のことだ。

「あれだけやられて気づかないほうがどうかしてますよ」

昔のことではあるが、ここにきてしばらく、一週間ほどは見事に頭に炸裂していたのだ。

あの時はしばらくミントの香りが離れなくて困った。

「ん、今日はラベンダーですか？ 珍しいですね」

「ああ、わかった？」

「どういう心境の変化ですか？ 前はミントしか入ってなかったのに」

「猫、みたでしょ？」

「だからですか」

なにか日常と違うことが起こると、それをきっかけに悪戯心が疼くのだそうだ。

「ストレスの発散なら他に当たってください」

「そんな、冷たい。 なっちゃんのいじわる」

冷たく見えるのは仕方ない。昔からだ。

「そんなこと言ってたらマスターの普段の物言いのほうが冷たいですよ」

まだ明かりの少ない店内を進みながらマスターの相手をする。

マスターは陽気で何も考えてないように見える。

でも言うことは一々のを得ていて、冷淡にして痛烈なのだ。

スタッフルームと札はかかっているも開ければそこはクローゼット。

真っ黒でスマートなエプロンが八枚。胸元中央に店名が白で刺繍されている。

長い髪を赤いリボンでポニーテールのように纏める。

「私のほうが冷たいだなんて、 なっちゃんには言われたくないなあ」

「どの口がそんなこと言うんですか、まったく」  
エプロンをさつと纏いマスターの横へ。

何をするでもない、カウンターでコーヒーを飲んでいるのだ。

そこには私の分のコーヒーも勿論ある。淹れたての温かいやつ。

「後から来る部下にコーヒーを出すやさしい上司。それが私だよん」  
「はいはい、ありがとうございます」

確かに私個人にはかなり優しいというか、甘い。

その分、私自身は自分に厳しく勤めることにしている、劳いなのかもしれない。

他人次第な部分は割り切ってしまうけど自分次第な部分は手を抜かない。

徹底的にやるのだ。

「そういえば、マスターも猫、見たんですよね」

動物園に行くと虫唾が走ると言っていたことがある、嫌いなんだろうか。

「虐めたりはしてないぞ、動物が嫌いなわけじゃない」

「よく言いたいこと分かりましたね。なんでわかったんですか？」

「動物について話したことって動物園の件くらいだろ」

動物園の会話は半年位前の話だった。よく覚えているものだ。

「そんなことより、もうそろそろ八時になる。仕事だ」

コーヒーは半分ほど残っていたけど、マスターが捨ててしまった。  
冷めたコーヒーとデリカシーのない男だけは許せないと、いつか

喚いていた。

ということでアパテイアにはアイスコffeeはない。

私も同感だ。風味、風情もあったものではないから。

次に飲む頃には冷め切っている黒い液体に価値はない、と判断されてしまった。

ちなみにマスターの、なににだけに、は、結構な頻度で増える。

私はオーダー用紙をテーブルの数用意し、来店を待っている。

水などの準備はマスターが抜き行っている。



コーヒーのことを詳しく知っているわけではないが、マスターのコーヒーはおいしい。

そしてなにより、仕事中のマスターは格好いいのだ。

「そうだな、今日はケーキにするか」

「朝から、正気ですか？」

「なんだ、その異常者を見るような目は」

確かに、私もマスターも、甘物だけで生きていけるような人間ではある。

「私たちはともかく、他の人はちよつと……」

「雨上がりの余韻はケーキにコーヒーだ」

「まあ、マスターがいいならいいですけど」

入り口側のカウンターに立て掛けてある看板に朝食セットメニューを書き込む。

とはいえ、いつもはサンドイッチの中身の違い程度なのだ。

それがケーキ。ケーキである。

「なんのケーキにするんです？ 同じものは数ないですよ？」

「そりゃあ、うーん。なっちゃんがフィーリングで出すに決まってるじゃん」

またいい加減なことを。

「まあいいですけどね、この時間来店ほとんどないですし」

常連の人はもう、家族構成まで語れる程憶えているし。

新規飛び込みの人はもっぱら昼過ぎてやってくる。

この時間で頭の中に浮かぶ人数はそう多くない。

「でもどうしましょう。一人、好みどころか名前すら知らない方が来るんですが」

最近の新規さんで水曜のこの時間にやってきて、わりとのんびりして帰っていく。

「ああ、彼か。なっちゃんの趣味でいいんじゃない？」

「どういう意味ですか？」

言わんとすることはなんとなく分かる。服装の趣味が極端に近い

のだ。

しかし、食べ物の好みまで一緒、というのはなんとも複雑な心境だ。

それくらい違っていて欲しい。

「いくらなんでも、食事の好みまで一緒とは限らないでしょう」

「いやー、わかんないよ？ 案外面思いとかだったりして」

今日のマスターはよく喋る。いつもと違うからだろうか。

「ん？」

マスターが視界から消えた。カウンターの下のほうへ潜っている？  
なにをしているんだろう。回り込んで覗き込んでみる。

「なにしてるんですか？」

マスターは折れたスプーンの丸い部分の先端にアイスピックで穴を開けていた。

「折っちゃったんですか？」

「古い大きいやつ、一本だけ出てきたからさ」

「なんで穴開けてるんです？」

「ないしょ」

悪戯を思いついたときのような嬉しそうな顔でそう言われると、  
どうしようもない。

ただただ、それが自分に降りかかってこないよう祈るだけだ。

そんなやり取りのうちに開店時間の十時となった。

深々とした時間は粛々と過ぎていく。

ドアの僅かな軋み、本日一人目のお客様。

アパテイアのドアには鈴のような音の出るものはない。

テーブル数は九つ。

決して狭くはない室内に神秘的なバランスで並べられている。  
神秘的、といっても私がそう感じているだけなのだけれど。

「いらっしやいませ」

ゆっくりと、確かに、粛々と、私は礼をする。

「こちらへどうぞ」

茶色のスーツを着こなしている老年の男性は静かに従ってくれる。店内は少し冷たい空気と最小限の照明によって聖堂のようにすら感じられる。

奥から二つ目、窓際のテーブルへ案内する。

テーブルは二人分ほどのセンターテーブル。

椅子は背が高く、曲線の素晴らしいウッドアームチェア。

どれも漆喰で塗られているような光沢をもった黒だ。

「失礼します。少々お待ちください」

小さなグラスに二口分ほどの水を注ぎ、再びテーブルへ。

「お待たせしております。こちらをどうぞ」

水を邪魔にならない位置に置く。

男性はゆっくりと私のほうを向き、

「コーヒーとサンドウィッチをいただけるかな」

落ち着いた声、眺める表情こそ変わらない、しかし遠慮を感じる

物言い。

「畏まりました。他になにかありましたらなんなりとお申し付けください」

マスターへオーダー用紙を渡す。

メニューが出来るまで、私は彼と外の景色を見ていた。

いつもマスターのコーヒーはいい香りだ。

人それぞれに違ったブレンドをするらしい。一つ一つに個性がある。

この男性のコーヒーは仄かにミルクの香りが混じり、柔らかく甘い香り。

きっと彼は優しくてロマンチスト、それなりに苦勞もしている。

薄く感じる香りは磨り減った印象。

「お待たせしました。ご注文の品はお揃いですか？」

男性は静かに頷いた。彼の周りは時間の流れがゆっくりしているみたいだ。

「失礼します」

こんな感じで日常は流れていく。

八人目の来店者を席に案内し、注文の品を届け終わると、マスターが呟いた。

「今日は違うことが多い」

確かに、独り言に頷いてしまう。

「ああ、すまん。聞こえてたか」

本人は聞こえてないと思っっていることは多々ある。作業中は特に。

「それはそうと、朝食セット注文ありませんよ？」

ほらね、朝からケーキなんて女の子でも食べませんよっと。

「まあ、テーブルはあと一つある。それに」

「それに、なんですか？」

「あいつがいるだろう？」

こんな日もあるかもしれない。

日常に紛れた非日常。

人生の甘い部分か苦い部分かはわからない。

ケーキとコーヒーのような、それ。喫茶店はそんな舞台なのかもしれない。

キィ、と軋みながらドアが開く。

「ほう、これはこれは」

多少変な服装でも驚くことはないと自負していたけれどこれには面食らった。

「彼氏？」

反論しなかったが彼は少なくともお客様、だ。

マスターは興味津々の様子で、珍しくチラチラと観察している。

「いらっしやいませ」

いつもと同じ礼、何度も何度も繰り返した動作。

なにか違うような、自分に見られているような違和感。

いつも似た服装ではあったけれど、ついに、まったく同じ服装の日がきてしまった。

エプロンを除いて。

「席はそこだけですな、よろしいですか？」

馬鹿丁寧で落ち着いた声、低すぎることはなく、よく通る。

私の台詞を取り上げたその男はニコリと笑った。

「ではあちらの席へお願いいたします」

私は再度頭を下げ、席へと案内する。

入り口から一つ目の席、といっても入り口からは少し距離がある。扉の開閉もあるし、なにより落ち着かないからとマスターが言っていた。

空間にはハーブの鉢などがインテリアされている。

音もなく席に着くその男。じつくりと眺めてしまうのは、今日だからだろうか。

唯一違うといえば、細い黒縁の眼鏡くらい。

髪は長いとも短いとも言えないような、それでいてよく似合う長さ。

自然な感じですよいてある。

いまだき珍しい黒髪はよく手入れされ、嫉妬を覚えるほどだ。

背は私より少し高い、しかし童顔の、少女とも取れる中性的な容姿はなんとも奇妙だ。

「失礼します、水をお持ちしますので少々お待ちください」

静かに、しかしはっきりと、これはマスターの主義でもある。

何かを行うときは静かに肅々とするべきである、らしい。

「お待たせいたしました」

水を邪魔にならない位置に置き、注文を待つ。

この青年はいつもメニューを決めて入ってくるようだ。

青年はちらりとマスターのほうへ微笑み、注文を始めた。

「モーニングのセットを。それとサンドウィッチをお願いします」

いつものセットか、ケーキの種類を私任せにする以外の変更点はない。

いつもの三点なのだ。たまに一品追加されることもある。

「畏まりました。他になにかありましたらなんなりとお申し付けく

ださい」

そう、いつもと変わらない。

何も変わらない。

「やっぱり気づいてましたね」

「ん、ばれてないと思ったのになあ。気があると思われたかね」

彼はそんな風な人間ではないだろう、そんなことはマスターも感じていただろうが。

一人、また一人と入れ替わり、店内にも仄かに熱が宿る。

送り出すのも、私の仕事だ。

全員、というわけではないが、軽く手を振ってくれる人は多い。仕事なのだから当然といえばそれまで、しかし仕事に気を使ってくれるのは嬉しい。

時間はいつも通り、寸分の狂いなく流れ、十一時を回っていた。

彼はコーヒーを三度ほどおかわりして窓の外をみていた。

「なにをしていると思う？」

「窓の外を見ているんじゃないですか？」

見たままを伝える。

なんとなく考えていることが分かってしまうのが似たもの同士の辛いところだ。

それが合っていることが大半ではあるけれど、意見するには忍びない。

「またまたあ、わかってるくせにい」

マスターは人を茶化しながらも食器や下準備を軽快にこなしている。この余裕は見習いたい。

「マスターはどう思うんですか？」

実際この人もわかってるんじゃないかと思う。

心の中を読まれていると思う節はいくつかある。

「私は超能力者なんかじゃないよ。なっちゃんこそ私の内緒をズバリ言い当てるじゃない」

「あれはマスターの日頃の行動から当て推量で言ってみたらまた

ま当たってただけです」

「にしては微に入り細に入り……話がそれちゃったね」

下準備が終了し後は食器を定位置に戻すだけとなったマスター。

「なっちゃんにどうやって声をかけようか考えてるとか、どう？」

満面の笑みを浮かべながらそう言った。

マスターの返答としては予想通り。だけど彼はたぶん違うことを考えてる。

黒い服からじわりと体に染みる太陽の熱と体表を撫でる風の冷たさに神経を集中している。

と、私は予想する。今日の御飯どうしようとか、考え事はたぶんしていない。

「またまた、マスターもそんなこと思っていないくせに」

「私は、だったらいいな、と思ったただだよ」

食器類は綺麗に磨かれ定位置に戻される。

時計は十一時を回っていた。

本格的なランチは扱っておらず、昼間はテーブルが埋まることは希な、珍しい喫茶店。

普通の店舗なら破綻しても不思議ではないこの店は、何事もなく運営されている。

一度だけ、問いただしてみた。が、マスターは笑いながら私のおかげだと言っていた。

不思議だ。こうやって働かせてもらって考えるようなことでもない気もするけれど。

「なっちゃん、今日はなに食べる？」

マスターは暇をもてあましている。私は一人残った彼のために掃除ができず困っていた。

「モーニングのセットで」

「フフッ、二人目の注文、だね」

こっちを見ながらニヤニヤして彼のほうをチラリと見る。

「茶化さないでください。だいたい雨上がりの時間はケーキだって

言ったの誰です？」

「うん、私。だから私もケーキを食べる」

そんな会話を聞いてかは分らないが、彼がカウンターの前へ来ていた。

「ごちそうさまでした」

軽い会釈。

マスターがニコニコしながら近づいていく。いやな予感がする。

「はじめまして、ご利用いただきありがとうございます」

深々と礼をするマスター、私もつられて頭を下げた。

ゆつくりと姿勢を戻すマスターは、なびく髪や、その流れるような動きが素敵だった。

「店長の九重です。当店のスタッフになにかあれば伝えさせていただきます」

「え、ああ、はじめまして、タチバナです」

彼は驚きながらもそう返してきた。タチバナというのか。

「ええ……と、支払いにきたのです」

それはそうだ、彼はずいぶん前に食べ終わっていたし、なんら不思議ではない。

「では、失礼して」

カウンターにはすでにぴったり置いてあった。

「確かに、丁度いただきます。ありがとうございました」

タチバナさんは入り口脇のハーブを一瞥し、会釈を交えて出ていった。

「じゃあ、なっちゃん、ご飯にしようか」

カウンターに二人分のセットを並べ、それぞれに、いただきます。

マスターはショートケーキ、私はオレンジソースの乗ったチーズケーキ。

コーヒーはその日の気分でマスターが選んでくれる。

「マスター、ほんとにイチゴ好きですね、そのうち真っ赤になる



んじゃないですか？」

「フツ、なっちゃんはおレンジ色になるかもねー。へへっ」

マスターは目立たないけれどイチゴ柄の小物も身につけることが多い。

そこまで好きなのかな？

「オレンジソースのチーズケーキは至高の一品ですよ」

オレンジの皮も僅かに混じり苦味と甘さ、酸味が調和するそれは毎日食べてもいいくらい。

私はどうも生クリームが好きになれない。なんでそんな甘ったるいもの食べるの？

「この甘さがいいんじゃない、甘酸っぱいのが最高なのよね」

また心を読まれたような気がする。

でも、ケーキを食べるときの儀式みたいなものだ。このやりとりは。

「しかし、いつ飲んでもマスターのコーヒーは絶妙ですね」

苦すぎず、薄すぎず、かといって毎日同じでもない、ゆらぎのようなそれ。

「まるで幻ですよ、同じようで、なにか違う、飲むほどに消えていく……」

「なっちゃん詩人だねー。私はおいしかったらそれでいいけどなー」

「なんか馬鹿にされた気分ですよ」

しばらく猫のことや朝方のことを話し、一足先に食べ終わった私は店内の掃除を始める。

十三時までは掃除の時間なのだ。毎日の日課、一日の中間地点。

「姑がいてもなっちゃんなら気に入るよ、きっと」

そういつてハハハと笑うマスター。コーヒー三杯目、まったく。姑などいたところで埃など残っているはずもない。

「ん？」

ハープの周りの砂をとってお掃除終了！

と、なるはずだったけど、封筒が落ちている。

白い封筒はハーブの鉢の間に落ち込んでいた。

「ん？ どうしたの？ なっちゃん」

「いえ、なんでもないです」

慌てて封筒を袖の中へ入れる、彼はこれを見ていた？

「なんか落ちてたんじゃないの？」

「なんで知ってるんですか！」

マスターがニヤツと笑い、私はハツとする。

「やっぱりねー、私の追及を逃れようなんて五年は早いよ」

妙に現実的な決め台詞だが、現状をどうやって打開するか考えるのにそれどころではない。

「やだなあ、虫ですよ虫。飲食店には天敵でしょ、ハハ」

「じゃあ袖の手紙はいつ、誰に貰ったのかな？」

「………違います、落ちてただけです」

これだ、もうこれでいくしかない。あとは違う誰かの手紙であることを析るだけだ。

渋々袖から封筒を取り出し、渡す。マスターの目は嬉しそうにキラキラしてる。

「宛名も書いてないから、ただの落し物だと思いますけど」

これが最後の悪あがき、あんなところに落し物なんて確信犯だと思ふ。

「いいからいいから、ん？ ふん？ へ？」

封筒を傷めないように開き、読み始めるマスター。

なにやら不思議な顔をしている、何が書かれていたんだろう。

「やっぱり違ったんですか？」

「この手紙を見つけたあなたへ」

「はい？」

「今夜二十三時三十二分、指定された場所へ行き、次の言葉を語れ」

「うわ、胡散臭い手紙ですね」

「あなたが好きです」

よりにもよって相手に告白させる恋文なんて聞いたこともない。

思わず後ずさりしていた。

しばしの沈黙。破ったのはマスター。

「冗談だよ、本当はなんかよくわからない。小説の一文みたいなのが貼り付けてある」

「差出人不明、ですか？」

「いや、最後のところに署名があるな、R・T・・・・タチバナかな」

マスターも苦笑いしている。

「なっちゃんに負けず劣らず変わり者だ」

「私のどこが変わり者、なんででしょうね？」

それを言うならマスターが変わり者で私が普通の人、であって欲しい。

変わり者から見た変わり者は普通の人、みたいな。

「ところでその、一文ってどんなのです？」

「やれやれ、上手くやったものだ。これで君は自由。何を求めるんだい？　だってさ」

「わけわかんないですね」

「うん、まあ取りに来るかもしれないし、一応保管しとくか」

十三時を回り、いつものように時は過ぎていく。

忙しくも暇でもない、生きているならこれくらいが丁度いい。

何事もない日常、私の脳裏で踊る小さな一文。

「やれやれ、上手くやったものだ。これで君は自由。何を求めるんだい？」

不意に後ろから声が聞こえた。ハツとして振り向いた先にはマスターがいた。

マスターは一瞬きよんとして、頭をかきながら言った。

「今日の営業は終了。明日の分の発注も終わったし、あとは私の仕事。お疲れ様」

時間は十八時、店内には二人しかない。

「びっくりさせないでください。何かと思ったじゃないですか」

「タチバナ君がきたと思った？」

「そんなじゃないんです、よくわからないんですけど」

今の声はマスターの声じゃなかったような、もっと暗くて、深い洞窟のような声。

引きずられていきそうな、奇妙な魅力を感じる声だった。

「そう、よくわからない」

呟く声はマスターには聞こえなかったようだ。

カウンターで帳簿と格闘、といった空気もなく。さらさらと筆を滑らせている。

「お疲れ様、早く帰っておやすみ。夜遊びしちゃ、だめだよ」

マスターはそう言って右手をひらつかせた。

「はい、お疲れ様でした。お先に失礼します」

エプロンとリボンをスタッフルームの回収箱へ。

リボンの後が付いた髪に軽く櫛を通し、今日の業務は終了。

「それじゃ、また明日よろしくお願いします」

「はいはい、狼に気をつけるんだよ」

あまりずるずると会話を引きずるのはマスターが嫌がるため軽く手を振って外へ。

「私は自由、なにを求めるのかな、なんて」

帰宅ルートは店の横をぐるりと回るだけ、狼に会うなんてことはもちろん、ないよね？

ところが、階段入り口には箱があり、今朝方の猫が思い出される。完全に忘れていた。ミルクを持ってきてあげればよかった。

箱の前までゆっくりと近寄る。猫を驚かせないように。

猫は寝ているように見える。丸くなり、体は緩慢な上下動を繰り返している。

まるでそこには私達しか存在しないような、無音。

自分の呼吸がだんだん大きくなっているような違和感。

心音が聞こえる。これは私の音だろうか？ それとも猫の？

猫に手を伸ばす、小さいころから野良には近寄るなど言われてき

た。

当時は理解できなかったけれど、狂犬病や寄生虫等の危険が大きいからだと最近知った。

しかし、そんな現実的な危険性は私の中で意味を持たなかった。触れれば切れるかもしれない、その艶やかな黒、まるで磨かれた黒曜石。

刀身のような美しさ。

猫の鼻に人差し指を近づけていく。

残り五センチで猫の体は動かなくなっていた。

私はそれに気づかず鼻を突付こうとする。

やられた。がぶり。

小さな猫は力こそ弱かったが、牙が丁度指の腹に刺さったため血が出てしまった。

「っ、ふう、私の指、おいしい？」

猫はがじがじと私の指に噛み付き続ける。流星に一撃目は偶然だったようで今度は痛くない。

「おなか減ってるのかな。私の指はあげられないし」

まあ育ちの悪い猫でもないだろう、箱入りだし。と、思い直す。

どうもこの子は私の人差し指がお気に入りらしい。

もう片方の手で猫を持ち上げ抱える格好。

しっかり噛み付かれた以外の目立った抵抗もなくすんなり腕に収まってくれた。

「マスターにミルクでも作ってもらおうか」

来た道を引き返す。

マスターのことだ、どうせ帳簿の整理なんて一瞬で終わらせている、はず。

店の入り口まで戻り、両手が使えないことを思い出す。

仕方ないからドアフレームに頭突きを二度ほど、しょうがないよね。

マスターも私と猫に気づいたようで、呆れた顔で三分待てとジェスチャー。

すぐに奥に入っていく。こちらの意図は伝わったようだ。

三分より少し早いくらいでマスターはやってきた。

左手に湯煎用の小さな金属ボウルを持って。

「ふふ、まるで母親のようだな。乳がでないから指かじらせてるのか？」

ドアを開けてすぐ、これである。

「素敵な旦那様をお待ちしてますよ」  
にっこり笑って返してあげる。

「ああ、そうだな。悪かった。店には入れるなよ」

「ええ、わかってます」

マスターは店の裏手までボウルを持ってきてくれた。

「仕事終わったんですか？」

「私にかければあの程度なんてちよちよいのちよいよ」  
フツツと笑うマスター、得意げな笑いなのかそれを自嘲しているのか時々わからない。

箱入り猫の箱の前、ボウルを下に置きしゃがみこむ二人。

猫は相変わらず私の指をかじっている。

「ほら、ミルク飲みなさい」

指を口から引き抜き、ミルクの前に置く。

それでも私の指がお気に入りのように、私のほうに擦り寄ってかじりつこうとしている。

「いまさらですけど、湯煎のボウル、予備ありましたっけ？」

「あるよ、これがそれだ」

左の人差し指をかじられつつ、感心する。

「流石に猫が使った調理器具は使えんからなあ」

マスターはなぜかニヤニヤしている。

「さっきからニヤニヤして、猫、そんなに好きなんですか？」

マスターは急に核心に迫られた容疑者のような不自然な素振りを

見せる。

「なるほどなるほど、それで、なに隠してるんですか？」  
ズボンの右ポケットが少し重みをもっている気がする。

「んゝ、ばれちゃうよね、やっぱり」

右ポケットから取り出されたものは、首輪、素材は綿だろうか、Dリングが一つ。

「首輪、ですか」

「なっちゃん動かないでね。その子が動いちゃうから」

マスターは、外れない、それでいて窮屈でないように猫に首輪をつけた。

「慣れてますね、流石は女主人」

「なっちゃんにもあげようか？」

「遠慮しておきます」

なんて言っているうちに、Dリングになにか追加されている。

今朝方見たスプーンの先端が取り付けられ、へ Nora Ap  
ath eia 〽と彫りこんである。

「朝からなにをしているかと思えば、これですか」

性質の悪い悪戯でなかったことにまず安堵。

「マスターもかわいいですね。まだまだ少女って言い張れますよ」

本人はもういい大人だと思われたらしく、眉間に少し、しわを寄せている。

「一言多いね、まったく。私は着替えて出かけるから、今日は急用以外は繋がらないでくれ」

「わかりました。でも、用事とか珍しいですね、いつもテーブルでボーっとしてるのに」

なんだか触れてはいけないことだったようで、マスターの笑顔は作り笑いになってしまった。

「旦那さんみつけてもクビにしないでくださいね。いってらっしゃいませ」

一応、危機感はある。従業員は二人で足りているから。真剣で真

剣じゃない話。

「うん、それは約束しよう。悪いな、気を使わせて、ボウルはそいつにプレゼントだ」

マスターはわざわざ膝を折り、猫に手を振ってから戻っていった。「いつまでも指かじってないでミルクのみなさい。まったく」

指を猫から取戻し、ミルクを少しつけて返す。ミルクは体温より少し低い温度だった。

猫は臭いを嗅ぐこともせずに私の指にかじりつく。

かと思ったら、すぐにかじるのを止めてミルクを飲み始める猫、味わかってるのかな。

そういえばこの猫は、あれからずっとここに居たのだろうか？

勝手な猫のイメージはいつだって自由奔放。

「ずっとここにいたなら、お腹へってもしかたないね」

そんな独り言を呟きながら猫の背を撫でる私。気にもせずミルクを舐める猫。

こんなにも無垢で野生のない猫なのに、捨てたやつはなにを考えていたのだろう。

ん？ でも、マスターが先に見てるから、捨て猫でもないんだろうか。首輪も作ってたし。

ボウルの半分ほどミルクがなくなる。気に入ったのかな。

それにしてもこの猫は鳴かない。食事を終えて優雅に毛繕いをしている。

全体的なバランスから見るとやや長い尻尾をふらふらと泳がせる。前足を舐める様はなんとも愛らしい。

今日はもう寝よう、猫を箱の中へ戻し、手を振ってさようなら。

猫は、というと、意外にも大人しく箱に入り、丸くなって寝てしまった。

この辺りで犬を見たとか聞いたこともないし、危険もないだろう。外はまだ夕暮れといった時分ではあるが、階段は真っ暗になっていた。



コツコツと靴の音が響く。

二階までの短い距離ではあるが、頂上部分が見えないことで長く感じる。

一応、電灯は設置されているのだが、別段必要でもないなので私が使うことは少ない。

私の部屋のドアはL字ノブと鍵穴が別に付いた黒いドアになっている。

ドアの鍵を開けたがドアが開かない、鍵のかけ忘れが発覚した瞬間だった。

気を取り直し鍵を開ける、人差し指の血はいつの間にか止まっていた。

ただいま、などと挨拶するような同居人はいない。

少女趣味があれば人形に挨拶などするのだろうか？

脱いだ靴は揃えて隅へ並べる、玄関には靴のほかに傘が一本だけ。私は別段そうは思わないのだが、マスターあたりに言わせると、寂しい玄関、らしい。

あちらの玄関は琥珀製の猫の置物、プリザーブの乙女百合、リシア輝石の原石など賑やかだ。

物の配置は流石なもので、それぞれが輝くように、乱雑に見えぬように配置されている。

これが私から見るココノエ的神秘なわけだ。

どんな基準で選んでいるのかも甚だ不可解ではあるが。

家に帰って私が行うことは、シャワーを浴びること、これは他人の手を洗うことに相当する。

もちろん、自宅ではの話。

ここの間取りは2DK。入ってすぐ左に物置と化した部屋、右にシャワールームがある。

正面はダイニングで右奥にキッチンが配置されている。

左側にもう一つ部屋があるが今は空き部屋だ。

洗濯機に洋服を脱いだ先から叩き込んでいく。朝方は冷えるが夕

方の冷え込みはまだない。

シャワールームには本当にシャワーしかない。あとは鏡とシャンプーとリンス。

私の生活の中で特に大きな部位を占めるのはシャワーである。

頻繁にではないが、一時間以上ボーっとしながら浴びていることがある、らしい。

マスターが暇だからと遊びに来たときに発覚したことで私がシャワーを浴びていた時のこと。

「すぐ終わりますから、適当にくつろいでください」

私の返事を聞いてしばらく待ったが、でてきたのは一時間余り過ぎてからだったという話。

シャワーを浴びるのは気持ちいいのだ。髪を伝い流れていく水を観察してみたり。

水の音が聴覚を支配してその独特なリズムから思いもしない発想がでてきたりと実に楽しい。

冷たい空気と暖かい湯、部分によって温度差を明確に認識するようになってみたり、奥が深い。

鏡を覗き込むようにしてフウーっと息を吐きだす、それでもこのガラスは曇ってはくれない。

自分自身、体に自信はない。太らない、という長所も発育がこれでは、ね。

そんなコンプレックスを感じたときは目を閉じ、理想の自分をいまの自分に重ね合わせる。

目を閉じたまま髪や体を洗い、まるで自分は完璧だと思い込む。幸せだ。

目を開くまで、だけど。

水が体表を流れ私の輪郭をはっきりと知覚させる。

私はその感覚を自分の望むように書き換える。

そこで私の水浴びは終了する。私の感覚全てに私を返す鏡のような儀式。

シャワーを止め、棚の上からバスタオルをとり、シャワールームで体を拭く。

足先は外に出てから拭くのだが、着替えを準備するのを忘れていた。

湿った体に触れる空気がスースーする。これはこれで気持ちがいい。

などと馬鹿なことを言っている暇ではない。私とて女なのだ。少しは恥らえ、私。

しかし私は無反応で、ベッドの上に横になるのである。

仰向けになり、手を伸ばしてみる。なにかひっかかるような気がする。

「あ、指」

手のひらを返して猫に噛み付かれた箇所を確認する、傷が見えない。血のかけらも。

傷がない、というのは不思議だ。怪我なんてそんなものかしら。まだ外気に触れたままの温度の布団、私の体温が染み込んでいくような穏やかな冷たさ。

不覚にも、そのまま眠りこけてしまった。疲れていたのだろうか？

ふむ。

私が目を覚ましたのはどうやらあれから三時間ほど後らしい。

辺りはもう群青がさらに暗くなったようになっていた。少し冷える。

この箱の中に戻されたことまでは覚えている。思えば彼女には少し悪いことをした。

明日の朝までに戻ればココノエも文句は言うまい。

保護を求めていると言えた義理ではないのだが。

しかし、ココノエも丸くなったものだ。以前は拒絶することしかできなかったのに。

なんてことを考えながらその場を後にし、人目につかぬよう外周の生垣から出て行く。

猫の体は便利だ。なにも、これに限ったことではないが。

「で、どちらまで？」

私は、いまにも玉葱の切れ端を口に捻じ込まれそうになりながら後ろを向いた。

いや、向かざるを得なかった。

「逃げようなんて八年は早いよ。まったく、だれが助けてくれって言っただけだか」

ココノエは拘束を解き、玉葱をポケットにしまう。

「すまない、今日は用事があったね」

「それは私にも言えないような用事なのかい？」

ココノエは少し拗ねているようだ、長い付き合いではあるが、面倒な話になるだろう。

「仕事絡みでね、少し、いや、汚い話だ」

世界の裏側が動くための筋書きを提供する仕事。末端、でもないが、場末のほうだ。

「ふうん、あんたも忙しいんだ」

ココノエはこの手の話は聞きたがらない。下手に変な用事をでっちあげるより話が早い。

「と、いうわけで。勝手な話だが少し出てくる」

しかし、私は首輪をつかまれ動けなくなる。

ココノエは私にリードをつけようとしているようだ。

「わかった。でもそれだけは止めてくれ」

「うん、わかればよろしい」

ココノエは本質的に優しいのだが、独善であることを認識しているため手加減がない。

「私も行く。着替えてくるから五分ほど待ってて。逃げるなよ」

逃げるなよ、の後には逃げたら玉葱食わせるぞ、という視線を感じた。

五分と言っていたがココノエは三分ほどで帰ってきた。

男装の麗人、という表現が全てを物語る。

上は白のカッターに黒のチョーカー、カフスも黒、ネクタイは赤、どれも決まっている。

下はノークッションのスラックス、これも黒だがやや光沢がある。

「君は本当に目立つ、私はそんな気品豊かな猫ではないぞ」

皮肉を言ったつもりだったが、ココノエはなぜか嬉しそうだ。

「気品豊か、ね。ありがとう」

まあいいだろう、では道すがら概要を説明しよう、今日の目的は……。

「うう、さむい」

調子に乗って裸で寝ていた私は見事に体を冷やしていた。

急いで服を探しに物置へ。服や雑貨などは全てそこに纏めてある。部屋の中は充分に暗く壁に足をぶつけるには充分だった。

声にならない悲鳴を上げ、なんとか洋服ダンスの前へ。

手に付いた衣服を順に着用していく。ネックの丈が違うだけでほとんど朝と同じ服装だ。

服を着ただけでは体の冷たさは改善されない。コーヒーでも飲むか、とキッチンへ。

薬缶にコップ三杯分ほどの水を注ぎ火にかける。

沸騰するまでの時間、私はその火の暖かさに肩の力を抜いていた。薬缶が蒸気を吐きだす。この蒸気もまた暖かく、部屋を満たしてくれたらと思う。

火を止め、愛用のマグカップにインスタントの粉をササッと適当に入れ、湯を注ぐ。

冷え切った私に黒い液体が流れ込み中心を熱していく。

どんなに体があったまっても背筋が温まらない、暖かいのに寒い、

これも贅沢かもしれない。

コーヒーを飲み終わり、ふと、手紙のことを思い出す。

アナログな壁掛けの丸時計は二十一時を七分ほど過ぎたところだった。

時計を見て封筒のことを思い出す。

寒かったとはいえ、考え無しに外出用の服を着たのもなにかの縁というものだろう。

マスターは結局、手紙の待ち合わせ場所を覚えてくれなかった。妬いてるのかしら。なんてね。

ニヤニヤしながら物置に戻る。真っ黒で足先までのインバネスが私の一張羅だ。

滅多に履くことのない外出用の靴を履き、鍵をかけ忘れたことを思い出しながら外へ。

今回は間違いなく、二度の確認を経て、鍵をかけたことを自らに確認させる。

昼頃来店していたおばさんたちも、なにやらこの辺りも最近は何だとか言っていた。

取られるものはなにもないけど、一応気をつけなくては。

階段を下りるとあの猫はいなかった。

どこかへ出かけたのだろう。箱の近くには見当たらなかった。

アパテイアの鍵は全て統一されているため、私も一応全ての扉を開けることが出来る。

店の周囲はどのビルも明かりが消え、店内の冷厳さを引き立てている。

薄気味悪い、ではなく荘厳さを感じるあたり、これもまたココノエの神秘かもしれない。

手紙はどこに置いていたかな、確か、レジの中に、あった。

どうも指定された場所はここから少し離れた港の倉庫地帯のようだ。

確かにひと悶着ありそうな場所指定ではある。それでマスターも

教えてくれなかったのか。

時間的に徒歩でも余裕がありそうだが、何かあったときのために下調べもおこう。

好奇心を押さえられない辺り私もまだまだ子供だな。

待っているのは愛の告白か、それとも社会性のないイベントか。

はたまた他の誰かへの手紙だったのか。

私はゆっくり歩き出す。

暗い夜道を一人で、真っ暗な格好が夜に溶け込んで誰にも見えなように。

「なあココノエ、なんでこんな所にきたんだ？」

時間はまだ二十時を少し回った程度、予定まではまだ三時間ほどある。

「いいじゃないか、まだ時間あるんだし、久々に逢ったんだ、昔話でもしようじゃないか」

ここは倉庫街と歓楽街の境にある、とある居酒屋、といっても屋台だが。

屋台に付属で席があるタイプの店で、ちょうど端の席が空いていたのでそこに座っている。

当然の如く猫である私は地べたにお座りだ。

「いつの話だ、君はあそこの話は嫌いだったんじゃないのか？」

あそこ、とは数年前までココノエも所属していた組織のことだが、あまり大声では話せない。

酒宴の席にしても笑えないほど滑稽な話だ。常人から見れば。

世界の裏側を未来視と膨大なコネクション、金で動かす。至極ブラックな団体である。

その規模は末端までの概算で一万人規模だとか何とか、下っ端には情報が流れてこない。

ブラックな上にオカルトな研究や実験例もあり、古く魔術と言わ

れるものも関係している。

そういう私達もこっそり開眼しているわけだが。

「いいじゃない、あそこは嫌いだったけどアスカのことは好きだったんだから」

ココノエはふっと笑い、ニヤニヤしている。女同士でなにを考えているんだか。

「それはそうと、ここの酒はすごいんだ。屋台なのに本格的なんだよ」

どうやらココノエはここの常連らしい。

なるほど、頼んでもないのにメニューが運ばれてくるわけだ。

おでんなのだが、卵が三つに大根とこんにゃくが一つづつ、卵三つは正直だろう。

「アスカはあれからどうしてたの？」

あれから、とはココノエを死んだことにして逃がしてから、ということだろう。

超常の力を身につけてはいたが、周囲には話していなかった為、大事にならなかった。

周囲が知っていれば簡単には逃げることはできなかっただろう。

「特に何も、でも私もあそこに飽きちゃってね。いつまでも安い酒は飲めなくてさ」

「ははは、そりゃしかたないね。ここの王気は最高だよ。芋だけどそれっぽくないからね」

王気、なんでも特上の芋焼酎らしい、芋焼酎どころか酒独特の臭いすらない。

アルコール度数は四十五度と高めで、体の中が焼けるような、まさに酒、といった趣。

らしい。私はまだ猫の姿なので酒を味わえないのである。

「でも、まさかあそこから逃げ出すだけで猫にされちゃうとはね、まいったまいった」

そう、私が猫なのはいわば罰なのである。話が出来なければ最悪



の状況になるところ。

変化した人が元に戻るには、呪った者の許可、もしくは殺害が一般的な手段となる。

組織の中で小耳に挟んだ話では、そういった呪いの類を祓える人間も世の中にはいるらしい。

「でもココノエはいいよね、そんなの関係なかったんだから」

まあね、とココノエは嬉しそうだ。彼女の特性上ああいった呪いじみたものは効果がない。

それで私も、逃げるときに罰則がないなんて意外だ、と思っていたのだ。

いつでもやめられる、と。その誤解がこの結果である。

「で、アスカは、今日その、呪いかけた人を殺しにいくんでしょ？」  
我ながら、猫一匹でなにができるのかと思いはするが、許可を得に行くなど無謀だ。

ならば奇襲なりを考えたほうがまだ無難だろう。

呪い手は女、支部の中で一人だけ表に出ないやつがいたからおそろくそいつだ。

「そうだけど、ココノエは巻き込みたくないな」

ココノエは折角逃げ延びたのだ、顔を覚えているものに見つかったら面倒なことになる。

力を借りたいのは実状で、巻き込みたくないのは本音ということ。  
猫が手を借りたい。冗談にもならないな。

「ふん、アスカがそのままじゃ面白くないじゃない、はい、これ」  
ココノエが大根を小皿にのせて地面におく。食べる、ということらしい。

「皿は私が買い取るよう話しておいたから気兼ねはしなくていいよ」  
どうも自分だけ食べて、ばつが悪いらしい。遠慮なく頂こう。

「でもさ、サキヨミがそれくらい読んでんじやないの？」

私達は未来視のことをサキヨミと呼んでいる。

ココノエの心配はもつともな話。襲撃がばれていてはなおさら勝

ち目はない。

「そうでもないんだ、そういう小さいことには使ってないらしい」  
呪い手の一人がどうなるうがあまり関係はないだろう。代わりがないわけでもない。

逃げたときには死んでるなんて呪いじゃないだけ優しさがあるだろう。

見せしめ、というだけのことかもしれないが。

「ふうん、なるほどね。でも、その人がいなくなると使われる可能性もあるのよね」

確かに、いなくなればやはり搜索が始まるだろう、結果殺害されたとなれば見過ごせまい。

しかし、それでも、やるしかないのだ。

「またまた、力んじやってさ、大丈夫だって。私がついてるから」  
ココノエの楽天家ぶりは変わっていないようだ。

彼女が味方なら何だってできそうな気になる。

「そうだな、卵もらえないかな。意外においしい」

「意外とは失礼だよ、私が認めた店だからね」

と、ココノエは自慢げに言いながら卵を頼んでくれた。

店主に失礼、とかではなくココノエの舌に、ということだろうか？

「ああ、そうそう」となにか思い出したようにココノエが唸る。

「今日の場所、手紙に書いてよこしたのはアスカ？」

なにを言っているんだ。こっそり出て行こうとしてたのにそれはないだろう。

それに、いまは猫だ。

「なにかあったのか？」

「ウチの子がね、店で見つけたんだ、手紙」

怖い顔しないでよ、とココノエの表情が強張る。

「それは、今回はばれていると？」

さあ、と肩をすくめるジェスチャーが返ってくる。

「それがね、その時間にメッセージを読み上げるように指定してあ

ったり、変なんだ」

変というのは意図が明確でなかったり、差出人に心当たりがあるあたり、ということだろう。

経緯を順に辿ると、確かに変だが、怪しいのはタチバナという男しかない。

問題はタチバナがどんな立場の人間か、ということだろう。

不安要素は多いが、こんな子猫の体でも私は力を振るえる。それは確かなアドバンテージ。

やるしかないのだ、と卵にかぶりつきながら沈黙する。

「また深刻になっちゃったね、どうにかなるよ。私がついてるからね」

ココノエはそんな風に私を笑ってから、勘定を済ませて、時間だ、と言った。

私、辻堂奈霧は他の人が言うには、幸薄い女である。

しかし一度たりとも不幸だとは思ったことはない。

たとえば生涯初めての恋文らしきものが、あれだったとしても、だ。こんな好奇心、現実離れた異常者かもしれない手紙にも、心が躍ってしょうがない。

そう、たとえこんな寒空の下を歩いていようとも。

「なっちゃんは意外に頭の中、幸せなほうだね」

とはマスターの言葉である。

港まで約五キロの道のり、それでも時間は余るだろう。

などと思い、ぶらぶらしていたのが災いしたのか、警察に職務質問を受ける始末。

いや、全身真っ黒で怪しいと思われるのは勝手ですが、まったくもって迷惑な話である。

これが初めてではないので質問に対する答えは、流れる水のようにだったけれど。

経験は大事だ。

倉庫街に近づくにつれ、民家の数も減り、明かりは少なくなっていく。

まったく、私はなんでここにいるんだろう。

インバネスの右ポケットに入れっぱなしの懐中時計を取り出す。いい時間になったものだ。指定された場所まであと五分といったところか。

三十分あまり余裕をもつての到着だ。

これがなにか謀略の類ならば、横から眺めていることが出来るだろう。

倉庫と倉庫の間を警戒しながら進む。もちろん逃げる道を覚えることも含めて。

逃げる準備をしている女、想像すると間抜けな感じがするな。考えないことにしよう。

こうして異常な考え方をもっている自分を認識することはとてもとてもつらい。

精神異常者がその理由やここがどこであるかさえ理解して精神病院にいるようなものだ。

私は幸運にもそういった烙印が押される一步手前の状態で踏みとどまっている。はずだ。

ところどころ点いている街灯がちかちかと点滅している。

倉庫街の暗闇は寂しさを、その空っぽな中身は虚しさを感じさせる。

いくつかの倉庫を回り、人がいた痕跡を探す。

もちろん逃げ場、隠れる場所、なにがどこにあるのかも。

偶然にも倉庫の一つは非常口が開いていた。二階は待ち合わせ場所が見渡せる位置だった。

なんという幸運か、それともこれも罠の類か。

考えすぎる。そんなことは常識的に考えてありえない。全部私の妄想だ。

約束の時間まであと十分。時計と周囲をチラチラと視線が泳ぐ。落ち着かない。

待ち合わせ場所は港部分に隣接した空き倉庫、その前である。まさかただの悪戯か？

かもしれないなあなんて思ったその時、人と動物が歩いているのが見えた。

「こんな時間に散歩、なんてこともないか」

もうしばらく様子を見よう。

よくよく見るとなんとも見覚えのある格好をしている。

ココノエ店長、なにをしてらっしゃるのか。

二人の近くへ寄ってくる船が一隻。灯火していないあたりがすこぶる怪しい。

マスターも目立たないように物陰に隠れたようだ。

ここから見る限り、船には四人が乗船していたようだ。男が三人、女が一人。

そもそもあんな上陸を見ては、堅気の人間ではないことは明白だ。マスターも危ないのわかってんだから逃げればいいのに。

船からは男二人と女一人がでてきた、残り一人は船で戻っていったようだ。

そこへ何を思ったか、マスターが近づいていった。なにをやっているんだあの人は。

三人となにやら話をしているようで、十メートルほど距離をとって双方動かない。

問答無用で襲われてない辺り、知り合いだったりするのだろうか？

もう少し近くで様子を見よう。

こそそと彼らの死角に回り込む。どうやらマスターはあの猫を連れてきているようだった。

「・・・・・・・・な・・・・・・・・しょ・・・・・・・・だ・・・・・・・・」

いまいちよく聞き取れないが、男二人がなにやら騒いでいる。

お約束といわんばかりに胸元から銃を取り出し、マスターに狙い

を定めている。

微動だにしないマスター、恐怖で体が固まってるのかもしれない。隠れている私も次に起こすべき行動が浮かんでこない。

この一瞬がととてもとても長く感じる。

でも、至極現実的に、撃たれたらたぶん、あっけなく死ぬ。

マスターは二人の男に悠然と近寄っていく。

五メートルほどまで寄ったところで、爆音と跳弾の混ざり合う音が響き渡った。

その音が何度鳴ったかはわからない。私は恐怖で目を閉じ両手で耳を塞いでいた。

恐る恐るマスターの生死を確認する。マスターは変わらずそこに立っていた。

「ははははははははははっ、もっとよく狙ったらどうだい？」

叫び声を上げて。よく似た別人なのかもしれない、あんなマスターを私は知らない。

弾丸はそれこそかすりもしない。まるで当てる気がないかのよう。なはずれ具合。

男たちはなにが起こったのか分からず、マガジンを入れ替え撃ちつづける。

それぞれが二十ほど撃っただろうか、怯えているのを必死に隠そうとしているように見えた。

女が一人、男たちの前にでた。猟犬を制止する狩人のように。

女とマスターに似た人物はなにか問答をしていたようだったが、決別したようだ。

マスターに似た人物はナックルガードのついた物騒な皮手袋を引き絞り、構えを取った。

もう一人の女、赤い、白衣が真っ赤に染まったような上着に黒いスカートが見える。

長髪は首の後ろあたりで赤いバレッタに纏められ、その動きを止めている。

ドン、鈍い音が鳴った。

僅かな時間を置いて、ドサリと重々しい砂袋が落ちるような音がした。

なにが起こったのか、いや、そもそも誰がそれを行ったのか。

マスターに似た人物が、拳を撃ち抜いた格好でさっきまで男が立っていた位置にいた。

人間が可能な動きなのか？

そこに至る過程が私には分からなかった。いや、知ることが出来なかった。

確かなことは、成人男性がゆうに三メートルほど吹っ飛んだというだけである。

あの細身からは想像できない、それは男たちも同じだっただろう。飛ばされた男はピクリとも動かない、気絶しているのだろうか。

それとも？

もう一人の男はというと、敵を見失ってまごついていた。

無理もない。離れて見ている私が見失ったのだ。余人の動揺はいかほどだろうか。

残った男は喚きながらマスターに似た人物に殴りかかった。

傍から見ても賢明とはいえないその行動は、見事にその男を海の中に叩き落した。

派手な水音と飛沫を撒き散らし、男の体は海に浮かんでいた。

残った赤い女は観念したのか微動だにしない。

いまさらのように鼓動が高まる。心音が私を焦らせる。

これからなにが起こるのか、なんとなく想像が出来てしまう。

きっと赤い女の頭と体がサヨナラし、その服に負けないくらい赤い液体を撒き散らす。

そうだ、なんて残酷な空想、なんてありえない事態、なんでこんなことが思い浮かぶのか。

視線を逸らす、しかし容赦なく映像は私を満たしてゆく。

頭部は手榴弾のように爆ぜ、脳と脳漿、血と肉がないまぜになっ

た酷い臭いが辺りを満たす。

なんでこんなにも鮮明にこれからを感じてしまったのか、吐き気を感じながら視線を戻す。

赤い女は胸元から銃を取り出し、銃口を喉元に当て……。

「やめろおおお！」

思わずそこに向かって走り出す、なんで飛び出したのか、わからない。

目の前で銃声がした、さっきのソレとは違う、聞いたことのない音だった。

私は、そこから前に進むことが不可能のように思われた。

口径の大きな銃だったのか、私にはその光景を、数秒前に見た気がした。

むせ返るような血と肉の臭い、弛緩し、崩れ落ちた体からは糞尿が垂れ流されている。

死臭と排泄物の臭いが混ざり合い、醜く、現実的な死がそこにあった。

マスターに似た人物は額に手をあて、なにかを考えているようだった。

私はどうなるのだろう、海の藻屑と消えるのか、ぐちゃぐちゃに丸められて生ゴミだろうか？

女は猫を抱きかかえ、こちらへゆっくりと歩いてくる。

「なっちゃん、どうしてここに来たの？」

女はそう問いかけてきた。今日までの八年間、この声を耳にしなかった日はない。

やはり、その人は私のよく知る九重椋だった。

「手紙が気になっちゃって、それで……マスターはどうして……？」

フウ、とため息を吐くマスター。いまにも泣きそうな顔をしている。

「どう……したんですか？」



私には今の状況も、マスターが泣きそうな顔をしている理由も、なにひとつ分からなかった。

「ココノエ、私のことなんだから泣くことないじゃない」

聞いた事のない声がした。幾分か歳を重ねた声、高すぎず、知性を感じさせる女性のもの。

そんな人物がどこにいるのか、候補者は先ほど肉の塊に変わってしまった。

残る役者は私とマスターしかない。しかし、そのどちらでもないことは明白だ。

「誰？ どこにいるの？」

当然の疑問を口にし、声の聞こえたほうを見る。

しかし、その方向にはマスターが立っているだけ。

「ああ、ごめん、紹介する。この猫はアスカ、私の友達なんだ。とある事情で会話が出来る」

マスターはそういつて猫の頭をなでている。そうか喋る猫か、メルヘンだな。

ここにきて喋る猫まで登場である。

これは夢だ。全裸で寝て風邪をひき、魘されている私の夢なのだ。そうに違いない、こんなことは現実ではありえない。

「なっちゃん、夢じゃないと思うよ」

マスターが私の心を読む。いや、そんな日常くらいじゃ騙されない。

涙を流して崩れ落ちるマスター。まるで幼子が離別を体験するよう泣きじゃくっている。

「あ……これ……？」

私になにが起こったのか？

視界に黒い斑点が無数に映り、夜よりも深く染まっていく。全身の力が抜け、膝をつく。

頭を押さえようにも腕が上がらない、こんなことはいままでもなかったのに。

いろいろな記憶が次々と、黒い視界に映し出される。走馬灯とはこういったものだろうか。

その中から、口をついてでた言葉があった。

「やれやれ、上手くやったものだ。これで君は自由。何を求めるんだい？」

やけに低い、男性のような声、朦朧とした意識のせいかな？

わたしの声はこんな風に聞こえただろうか、記憶にない、頭の中に響いた言葉の朗読。

ゴトン、どうやら私は倒れたようだ。

視界は最悪のブラックアウト、衝撃に痛みはなく、衝撃として認識した。

これは本当に私の体だろうか、そんな疑問を最後に、意識はどこかへいつてしまった。

ざあざあと水の音が聞こえる。目の前は、暗い。

遠いような近いような、狭い部屋に反響している風な水音。

よくよく感じてみれば、私はどうもシャワーを浴びているようだ。熱くもなく冷たくもなく、ただ、なにかを洗い流すように。

壁に寄りかかるように座っている自分、水とは別の、なにかが撫でるように体を這う感覚。

私はいつシャワーを浴び始めたんだろう。

まだ視界がはっきりしない。焦点が合わず、体を動かすこともできないうだ。

いや、動かせるが動かしたくない、動かそうとすることに至極、神経を使う感じ。

「なっちゃん、起きたの？」

不意にそんな音がしたような気がした。

夢の中にいる自分に誰かが呼びかけているような、雑音ともBGMともとれない曖昧な音。

「ここは……どこ？」

不意に浮かんだ疑問を独り呟く。

「ここはわたくしココノエ亭のシャワールームだよん」

そう、ここはマスターのところのシャワールーム。

ん？

「ってなにやってるんですか！」

意識が体に帰ってくる。私の体を撫でるように洗う手を振り解き、丸まって体を隠す。

なにをしているのかなど明白だ、マスターは私の体を洗っている。裸のくせに臆面もなく胸を張り、九重権は言い放った。

「なっちゃんの体を優しく洗ってあげてるのよ！」

おまけにVサインまでビシッと決められた。やけに楽しそうなふりをしている。

マスターが笑っているのはいつものことだけど、今日はなんか渴いている。

まるで嘘をついた子供が、にこにこ笑ういい子を演じるような、そんな感じ。

「洗ってるのはわかってます！」

そう、わかってるいるのだ。私が聞きたいのはそんなことではなく……。

私はなんでここにいいのかということ、いや、それもわかってるんだった。

「マスターは、どこで私を見つけましたか？」

私は慎重に言葉を選ぶ。マスターはあの場にいたかもしれないし、いなかったかもしれない。

あれは何か悪い夢だったかもしれないのだから、それに賭けてみるのも悪くない。

「なっちゃん、本当に覚えてないの？」

私だって出来れば忘れてしまいたい。でも困ったことに、あの臭いだけは忘れられなかった。

私は首を縦にも横にも振りたくはなかった。

「マスターはなんのためにあそこに？」

マスターはそっか、と呟いてシャワールームから出て行った。

理由すら、言えないということなのだろうか？

マスターが着替え終わるのを確認し、私もシャワールームから出た。

着替えはマスターがもってきてくれていたらしい。

マスターは部屋の真ん中、テーブルにコーヒーを二つ置き、私を待っていた。

ここは間違いなくアパートニアなのだ。

調度品の違いこそあれ、家具は同じものが揃っている。

「後から来る部下に、コーヒーをいれて、まっている優しい上司」  
私はそんなことを思い出し、口からは自然と流れていた。

あんな普通の日常が、壊れるはずはないと思っていたし、壊れてほしくなかった。

白い絹のパジャマの胸に不釣り合いなイチゴの刺繍、この不思議な人は、少し笑い、続けた。

「それが、九重権」

少なくとも、と付け足し、いや、ここまでだな、と打ち消した。

私は頂きます、と一礼し、席について日常を味わった。

コーヒーに味がないような、そんな感覚が、いままでの日々を疑わせる。

「なにから話そうかな」

マスターは切り出す、私のこと、それとも彼女らのことにしようか、と。

私は答える。

「いいえ、なんのために、あそこに行ったのか、それだけ聞かせてください」

あの怪しい女たちがどんな人物かに興味はない。

九重権を私は既に知っているはずだし、知っていないことは、彼

女が知られたくないはずだ。

怪しい女たちが、どこでなにをしていたとしても、関わりを持たなければ問題ない。

「なんのために、か」

マスターは呟き、無音の時間が続く。

窓の外は暗いようだ、朝なのか夜なのか、どちらでも構わないというような部屋の空気。

どれほど経っただろう、一分ほどの短い時間だった気もする。やけに長く感じた。

「大好きな友達のために、だな、うん」

自らに納得させるように答え、頷くマスター。

「友達のために、ですか」

彼女がそう言うのならそうなんだろう。私が口を挟むことではない。

なによりも、彼女に友達がいるという会話を、私は初めて聞いて驚いた。

誰にでも友達と呼べる人間はいるだろう、個人差はあると思う。たいしたことのない仲であったり、いわゆる親友という仲であったり。

マスターは気軽に友達という言葉を使わない人なのだと、私は知っていた。

彼女は彼女の愛するその友達のために、あの場所にいたのだ。

「なっちゃんはこのからどうするの？」

どうしようなんて考えてはいなかった。私の大事な日常はここにあるのだから。

マスターがあそこにいた理由は、私にとっても、それだけで意味のあるものだったから。

「どうして、そんなことを訊くんですか？」

マスターは困った顔で、普通じゃないのは、私だと思ってたんだけどな、と言った。

右手で頭をかきながら続けた。

「あんな光景を見たら、殺されるかもしれないって、思わないかな」  
ああ、そうか、マスターはまだ私を身内だと認めてくれていたのか。

私が怖がっているんじゃないかと、真剣に考えてくれていたみたいだ。

「私は逃げません、けど、もし逃げるといったら、マスターはどうしましたか？」

いくつかの会話が飛んでしまっている。でも二人の間では成立してしまう会話。

こんなにも、普通じゃない。

「なっちゃんも言わずに、逃げたら、たぶん、泣くよ」  
マスターは天を仰ぐようにして、泣いている、ようだった。

「ははは、ココノエは私だけでは不足なようだな、彼女にも粉をかけていたのか」

聞きなれない声が玄関のほうから聞こえてきた。

声の主は身長百八十はありそうな女性。金髪のポニーに碧眼、ハーフかもしれない。

肉付きの良い、大人の女性の体。

俗語も使える辺り、日本には縁がある人間のようなのだ。

マスターは左手で目の辺りを拭って、うるさい、ばか、だってさ。  
なにやら二人はいい仲みたいだ、少し妬ける。

「紹介しよう、彼女はアスカ・シニフェ、私の大切な友達さ」  
言いながらアスカの首に手を回して寄りかかっている。

「よろしく、アスカと呼んでくれ」

そういつて握手を求められ、慌てて手を握ってしまった。

「慌てて握手をする日本人に会ったのは初めてだよ」

そう言ってニコリと笑うアスカ。綺麗なのに男の人のリズム、なんか苦手だ。

「ココノエはもったいぶっていたけど、君が倒れたときのことを、

聞いてもらえるかな？」

気にならないと言えば嘘になる。聞けるのなら、是非、と承諾した。

来たな、とアスカは言った。

私には最初どこに船がいるのか見えなかったが、確かに音が近づいてくる。

一体何人の護衛を連れてくるのか？

小型船舶である以上、規模は小さいだろう。

相手にも能力者がいたら？

隠密行動で目立つのは不味い、能力よりも工作向けの人員のはずだ。

呪い手がいなかったら？

いると信じたほうが建設的だ。

「ココノエ、気負いすぎるのは君の悪い癖だ、君はいつだって逃げられる。それを忘れるな」

確かに、失敗など考えるだけ無駄だ。失敗はあっても敗北がなければ勝利には充分だ。

「借りがチャラになりそうなんだから、力んでもいいでしょ」

そうだな、君に心配など無用だったな、とアスカが呟く。

それはそれで寂しいなあ。

船が接岸し、男が二人、女が一人降りてくる。

逃げられるのは得策ではない、船が出るまでは我慢しなくてはならない。

船が出て行くのを男たちは見送り、歩き出した。

後ろから近づき声をかける。

「もしもし、ちょっとお付き合いいただけませんか？」

後ろからの攻撃で全ては終わっていただろう、実際なぜわざわざ声をかけたのか分からない。

もしかしたら、私はまだどこかで人殺しを許せないのかもしれない。

そう、それは自分がそうなることを拒んだ結果。アスカの為でも手段は選ぶ。

私の変わりにアスカがそうしてきたのだから、私は人を殺してはいけないのだ。

でも、今回はもう、だめかもしれない。

「私の知り合いが猫になった、元に戻してもらおう」  
刺激しないように、ゆっくりと、しかし舐められないようにどっしりと。

男二人は警戒心むき出しでこっちを睨みつけてくる。

女は、なんとなく納得したような素振りでくすりと笑った。  
当たった。

この女が呪い手だ。男二人はおそらく最低限の世話役だろう。

「死にたくなければ、ということか」

女が呟く。

ニヤリと笑い、君たちの力次第だな、と付け加えた。

「なら、交渉決裂だな！」

男二人が銃を構える。

デザートイーグル。だからなんだというのだ、私にはそんなものは関係ない。

女の不敵な笑みを見るのが妙にいらする。

私は女のほうへ歩き出した。

静かな発砲音が連続する。

一発、二発、三発、徐々に焦燥感が男たちに湧き上がる。

なぜ当たらないのか、半径二十メートルの的を外すことはないはずなのに、と。

「ははははははははっ、もっとよく狙ったらどうだい？」

できるだけ、狂っているように、殺すことを恐れない人に見えるように、笑い、挑発する。



当たらないのは彼らのせいではない、全て私が悪いのだ。

私が私である為に全てを受け取らない。

拒絶こそが、九重椋の本質なのだ。

マガジンに空にするまであの大型拳銃を連射できるあたりは流石だが、それだけだ。

アスカの力があればこの場で私に敵うものはいない。

彼女の力は身体強化、といっても筋肉の増強とかそういった物質的なものではないらしい。

本人が言うには、物体が結果として発揮した力を好きな倍率にして、実現するんだとか。

私にはなんのことやらさっぱり分からないが。

分からないとしても、今の私はどこかのヒーローとも張り合える、なにも怖くはない。

まっすぐ五メートルほどまで近づいただろうか、女が前にでて二人を制止する。

「アスカか、私は彼女が嫌いだね、それに、私はここで死ぬことになっている」

至極冷静に、訳の分からないことを口にする女。

自暴自棄になった、覚悟の足りない青年のような不実さは微塵も感じられない。

彼女は真剣に狂っていると感じた。

「死ぬなら、許してくれてもいいんじゃない？」

私としては手間がかからず願ったりだ。

「だめね、いったでしょう、私は彼女が嫌いだって」  
ちよっと脅しをかけるしかないか。

私は昔使っていたナックルガードつきの手袋をして、思い切り男を打ち抜いた。

おそらく彼らにはそこに至る過程を知ることではできなかっただろう。

弾け飛ばないように手加減はしておいたけれど、男は三メートルほ

ど後方に宙を舞った。

弾け飛ばないように、とは文字通り衝撃で破裂させないように、ということである。

アスカが手加減せず立ち回ってビルの一室がスプラッターのセツトみたいになったのを見た。

あの時はB級映画を見たときのような楽しみはなく、ひたすら吐いたっけ。

それでも、と言いかけたときにはもう一人の男が叫びながら突進してきた。

海の中で頭を冷やすがいい、かなり冷たいと思うが。

殴りかかってきた腕を掴み、水平線に向かって投げとばす。

飛距離は二十五メートルほどだろうか。

「それでも？」

私は女に確認する。彼女は怯えるどころか、にこやかに微笑んでいた。

「貴女は変わらない、私には手に入らない」

だから、と、女は懷から男たちと同型の拳銃を取り出し、自らの喉元に突きつけた。

私は呆氣にとられ、引き止める言葉も、いまの自分なら止められることも忘れてしまった。

あくまでも、呪われたものが呪ったものを殺さなければ、壊呪は成立しない。

彼女が自殺するということは何処にいるかも分からない祓い手を捜すしなくなってしまう。

そんな冷静な思考が戻ってきたころには、とうに引き金が引かれていた。

とても聞き覚えのある叫び声と同時に。

目の前が真っ赤だ。半透明のゼリーみたいなものがビチャリと飛び散った。

薄明かりの中のそれは酷く汚れて見え、気分は最悪だった。

崩れ落ちると同時に排泄する首のない人形は、しばらく夢に出てくること請け合いの映像だ。

倒れこんだそれは、頭のあった位置から血を噴出し、私を汚した。私はなんだ？

なにをここにきたんだ？

私達は、彼女を殺しに来たのか、ああ、その通りだ。でも、私には彼女を殺させることはできなかった。

「アスカ、ごめん」

「気にするな、あいつは勝手に死んだんだ」

本来の目的はそっちのけで、私はその言葉に救われた気がした。アスカを抱え上げ、なっちゃんの声がしたほうに歩いていく。

なっちゃんは呆然と立ち尽くしている。

「なっちゃん、どうしてここに来たの？」

結局、集合場所は教えていなかったはずだし、あのときはここにくると思ってもいない。

手紙も店に保管してなっちゃんは興味を示さなかったはずだ。

どうしてきたの？

どうして、私達を見てしまったのか。

アスカは時間がかかるかもしれない、でも望みはある。

これまでの関係が壊れてしまうような、そんな寂しき、悲しきが溢れてしまいそうだ。

ああ、私はまた一人、友人をなくしてしまうのか。

理由を訊いたはずなのに、まるで責めているかのような言葉になっってしまった。

罰というのはこういう気持ちなのだろうか。

「手紙が気になっちゃって、それで……マスターはどうして……？」

彼女からの、どうして、は、酷く堪えた。

一般社会に生きるものには到底理解できないような惨状、なぜ私がそこにいるのか。

彼女は一般人で、私は異端者、なぜ一緒にいるのか。

私との関係は嘘だったのか、私と違う世界に生きているのか、と問われているような。

あるいは、自意識過剰なのかもしれない。

私はいたって普通で、こんな能力など使うのが当然なのかもしれない。

それでも、私には分からない。

今日までそこにあった心地よい日常が壊れていく気がした。

「どう……したんですか？」

私は涙を堪えているつもりだった。

彼女はなにも知らない、私がなにをしていたかさえ。

たとえ全てを見ていたとしても、理由がわからなければ是非を問えない。

中立的でいて、独善的、自らの正義で判断する彼女。

結局は私を受け入れてくれることを信じたかった。

涙の理由は話しても理解を得ることはできないだろう。

「ココノエ、私のことなんだから泣くことないじゃない」

アスカが私を慰める。

違う、私は欲張りだから、両方守れなかったことに、悔し涙が滲んでくるんだ。

「誰？ どこにいるの？」

疑問を口にし、きよろきよろと辺りを見回すなっちゃん。

せめて別れるまでは日常を取り戻していたい。

「紹介しよう。この猫はアスカ、私の古い友人なんだ。とある事情で会話が出る」

あの顔は確実に信じていない顔だ。

猫の発声方法とかそんな理論的なことも考えながら今を否定する彼女そのものだ。

ここにきて喋る猫まで登場である。これは夢だ。魘されている私の夢なのだ。

なんて思っているに違いない。

「なっちゃん、夢じゃないと思うよ」

どうやら凶星のようだ。

でも、彼女は信じてはくれない。

私を信じているから、信じきってくれているから、現実から目を背けなければならぬんだ。

信じてくれるのは正直、嬉しいと思う。

いまの自分は嘘だ、って言われてるみたいな感じがして、心臓がトクンと鳴った。

全身に力が入らない、涙が止まらない。

拭っても拭っても、頬を伝い、顎から落ちていく。

息が上手く出来ない。

ひっく、ひっく、としゃっくりが止まらないような変な感じ。

悲しくて、悔しくて、なにを考えているのかも、わからない。

不意に、聞いたことのない声が聞こえた。

深く低く、底の見えない大穴のような男の声。

「やれやれ、上手くやったものだ。これで君は自由。何を求めるんだい？」

それは耳に新しい言葉をつらつらと並べ、ゴトンと鈍い音をたてた。

鈍い音は、なっちゃんが倒れた音だった。

それを見て、体はや々と私のものになった。

走って駆け寄り、抱き起こす。

血溜まりに倒れこんだ彼女の一張羅のコートは赤黒く染まり、顔の血は私を憔悴させた。

幸い緩やかに崩れたようで、傷はないようだった。

「明日になれば、夢は覚めるよね」

呟く、アスカに問いかけたのか、それとも自分がそう願ったのか。「ココノエ、彼女のコートを私に貸してくれないか」

なんで、と振り向くと、アスカは糸纏わぬ姿、人の身一つで立

っていた。

首には私があげた首輪をつけたままになっていたが。

「服を忘れていた、あの女の服は縁起が悪そうだ」

何故かはわからない、アスカが元に戻れたのは本人も不思議だったようだ。

なっちゃんのコートを脱がせ、アスカに渡す。

「彼女は私が持とう、ココノエは鍵を頼む」

そう言ったと思うと、彼女は一瞬でなっちゃんを運び去ってしまった。

一陣の風のように。

私も急いで後を追う、私にも強化は残っているようだ。

走り出す体はいつもより軽く、風のように走れた。

でも、明日を思う心はいつにも増して重く、帰り道は倍の距離を感じた。

マスターの淹れてくれたコーヒーが半分ほどなくなったところ、アスカは言った。

「信じるか信じないか、それは君次第だ。今までを取り戻すために、昨夜を夢にしてもいい」

私は返答に困る。

当然だ、昨夜のことなんてどうでもいいのだから。

マスターはこれからもこの日常を続けるつもりがあるのか、私にはそれだけだ。

アスカがどんな人だとか、マスターがなにをしていたとかそんなことは些細なことなんだ。

捨てられて困るとか、行き先の世話をしてほしいとかそんな問題でもない。

辻堂奈霧は九重椀との変わらない、少しづつ揺らぐ日常にのみ固執する。

「私はそのことについてはなんとも思いません」

マスターが不安げな表情で席を立ち、所在無くうろうろしている。  
「なんとも思わない、とは、どういうことだろう」

アスカには伝わらなかったようだ。

「別に自棄になっっているわけじゃなくて。過ぎたことだし、私は私、貴女は貴女なんです」

解っていただけませんか、と私は続け、返答を待つ。

受け取り方によっては酷いことを言ったのかもしれない。

貴女方に興味はない、と。

「誤解されるかもしれないので言っておきますが、私は九重権が好きです」

これがどんな感情かは知らない、男女のそれと同じなのか、そうでないのかさえ。

「つまり君はココノエが今までどおりなら構わないと？」  
頷く。

「私はマスターがそれを行うとき、それは彼女の一部なのだと、受け入れます」

アスカは私を品定めするような目で見ている。

正直、いい気持ちはしない。

そんな無言のやりとりを打ち破るかのように、マスターが私に抱きついてきた。

体を私に押し付け、髪の匂いを確かめているようだ。

後ろ髪をかきあげ、うなじに沿うように顔を寄せてくる。

どこかくすぐったいような、恥ずかしいような、不思議と落ち着く仕草。

「私もなっちゃん好きだなあ」

「それじゃあ、また元通りでいいんですね」

やれやれ、と肩をすくめるアスカ。

「ココノエ、私は仲間はずれかい？」

「ふふ、アスカが妬いてくれるのもうれしいなあ」

なんて言いながら私の髪を玩んでいる。  
普段はこんなにも触れ合うことはない。

これもまた、新しい日常になってくれればいいのに。  
でも、心に影が落ちるのだ。

「彼らの報復はないと言い切れますか？」

一人は確実に死んだのだから、無関心ではいられまい。

田舎やくざでもそのあたりはわかっているところだろう。

質問には沈黙で応えられた。

アスカがコーヒーを一口、そして今更な疑問を持ち出してきた。

「なんで猫だった私が、ここに辿り着けたと思う？」

そう、たまたまこのあたりに派遣されてきた、そこでたまたま逃げ出して、猫になった。

猫になった町にはココノエがいた。

出来すぎだろう。

アスカの質問に本人も含めた全員が首を傾げる。

それはここにいる人間には当然の疑問だったのだろう、そして解答の持ち合わせも、ない。

「論点はどこでしょう」

私にはその団体の指針はわからないし、そもそも具体的な活動内容すら知らないのだ。

「こんなにも都合が良かったのはなぜか、かな」  
マスターが口火を切る。

「なにか狙いがあった、もしくは単なる偶然だったんじゃないかな」  
偶然であることは希望でしかないだろう。

「では何のために？」

ここは渦中のアスカに訊くしかない。

「それがわかれば苦労はない、と言いたいところなんだけど」  
言いよどむ、やはり心当たりはあったのだ。

「けど？」

マスターが私の肩に顔を置きながら促す。



「私は今ひとつ手のひらで踊っている自覚がないんだ」

なにかしろ相手方の意図に則って派遣されたが、そこからの干渉は極小だ。

それはアスカがアスカであれば、自然に達成できるという、救いようのない計略。

「ただ、今回はなにやら儀式のミニチュアをここでやるとかやらないとかで派遣されたんだ」

怪しげな単語がさらりと飛び出してきた。儀式、ねえ。

「それはどんな目的で行われるんですか？」

至極一般的な儀式、冠婚葬祭やそれに近いものならば目的を知れば輪郭が見えてくる。

「人の願望を叶えるとか言ってたような？」

生贄とか物騒な話がでてきそうな目的だ、どうせろくなことではない。

私はあくまで末端だから情報が流れてこないんだ。と、アスカはクスと笑う。

「でも、薄気味の悪い儀式だったのは確かだな」

なんでもアスカが聞いた話では生贄が絡む儀式であるらしい。

神木に九日間にわたり、あらゆる生きている動物の死体を掛けていく。

その犠牲の死、または腐りかけた死体によって神木の神格が強化される。

一日に一人と二匹を掛けていき、最終日に生贄を捧げ、人民の願望は満たされる、とのこと。

「最後の生贄は生きたまま泉に放り込まれて、浮かんでこなければ願いが叶うんだと」

馬鹿げている。

今の時代に生贄などと、正気の沙汰ではない。

「狂っていると思うだろう、でもあそこの中にいたら信じられるよ」  
それほど現実がずれているんだ、可笑しいだろう、とアスカは笑

った。

マスターはなにか思うところがあるのだろうか、眉間にしわをよせ考え中のご様子。

「なにか思いついたんですか、マスター？」

マスターはコーヒートを淹れなおし、ふう、とため息を挿んで言った。

「儀式は正しく行われるんでしょうね、一騒ぎありそうで嫌になるわ」

私達がいるのなら、生贄候補ということでしょう、と、マスターは言う。

確かに、アスカがわざわざ派遣されたということは、彼女がそうである率が高いだろう。

そこにマスターがいたのは偶然か、仕組まれていたのか。

「そういえば、マスター、お店は」

私がふと頭に浮かんだとても大切なことを思い出す。

時計を見ると朝の三時、私が倒れてからそんなに時間は経っていないようだった。

「大丈夫、今日は休まないよ、これから次第では休むかもしれないけどね」

考えても仕方がない、というのが私とマスターの共通見解のようだ。

しかし、アスカは難しい顔で悩んでいる。

一番危険なのは確かに彼女だろう、でもこの中で一番争いに向いているのも彼女なのだ。

こと肉弾戦となれば彼女に勝てる人間はいないのではないかとすら思える。

「アスカさんはこれからどうするんです？」

私としては争いには巻き込まれたくはない。

「なにも、とりあえずここに住むよ」

予想通り、まあそうなりますよね。

マスターも数少ない友人だから大切にするだろうし。

「少なくともここにいる間はなにも起こらないから、なっちゃんも心配しないで」

なんて根拠のない自信でいっぱいである。

「わかった、ナキリには悪いことをした、なるべく騒ぎは起こさない」

私の意図を少しは汲んでくれたようだ。

「じゃあ、私は勤務前に少し寝ます、マスターも少しは休んでくださいね」

私は自室に戻り、ベッドの上で疲れを実感した。

大の字で投げ出した体は重く、すぐにでも眠ってしまいそうだ。慣れないことはするものではないな、なんて思いながら。

明日のセットメニューを考えていたところまでは覚えている。

習慣とは素晴らしいものだ。

三時間ほどの睡眠でもしつかりと目が覚める。

もちろん、目覚ましは半狂乱ではあったが。

体も頭もどんよりと、鉄のように重い靄が詰まったような倦怠感。こんなときはシャワーだ。毎朝の日課だ。

シャワールームにはいつもの光景。

その中であって、鏡に映る私はどこがとは言えないが、病人のようにはみえた。

なにもかも忘れたい、今の私は私じゃない。

いつもの私に戻りたい。

いつの？

私は私になりたい。

空想の、完璧な存在。

体を伝う水、まだ温まりきらない水は冷たく、私の体を揺する。小刻みに震える全身の筋肉は、私の心とは裏腹に激しく動く。

自分の体ではないと思えるそれは、私の空想にはなくてはならないものだ。

求めるものは昔求めていた私、時間の中に埋没した理想の私。次第に熱をもつ水は、私の空想に温度を与え、私は触感を放棄する。

触れている、流れている、ではなく、温度がある、という認識。その水は私の輪郭を描けない。

水は滑らかな私の肌、流れるそれは美しい髪、纏うのはしっとりとした温かい空気。

私の外観は水で構築される。

髪、体、と洗い終え、どれくらいこうしているのだろう。

ああ、仕事だ。

後ろ髪ひかれる思いではあるが、それはまた夕方にとっておこう。いつもの朝、と言い切れないのは、やはりあの凄惨な光景のせいだろうか。

まだ肌に残っているのか、それとも鼻腔にか、あるいは脳に、死臭が染み付いているようだ。

体調は悪くない、でも、なにかもが死んでいるかのような、そんな感触がある。

私は不快感を纏いながら店に向かった。

毎日通る道筋は寸分の狂いなく、当たり前前にそこにある。

昨日そこにいた黒猫はもういない。

私に噛み付いた黒猫、青いガラス玉のような瞳が思い出される。

まるで嘘のような昨日、夢の中にいたのではないかという気にすらなってくる。

この臭いがなければ。

夢だったらよかったのに。

Apathiaには相変わらず私とマスターがいて、いつも同じ、少し違う毎日を過ごす。

いや、いままでが夢だったのかもしれない。

ドアを開け、店内を見渡す。

そこは変わらず冷厳で、纏わりついた臭いを一喝で吹き飛ばしてしまった。

ここには毎日がある。

「マスター、どこですか？」

いつものようにカウンターの中に陣取る人影は見えない。

隠れているのかと裏側に回ってみても、やはりいない。

キィ。

ドアの開く音、マスターが私よりもあとに来るなんて、初めてではなからうか。

振り返った先には、アスカがいた。マスターの服を借りているようだ。

「おはようございます。マスターはどこです？」

アスカはやれやれ、といった感じで歩きながら言った。

「ココノエじゃなくて悪いな、あいつはまだ寝てるよ。ナキリはこんなに早く起きるのかい？」

どうやら、不機嫌が顔から溢れていたようだ。

私らしくもない。無表情だと言われることはあっても、だ。

こんなにも早く、なんてことはない。

私はいつもの時間に起きて、ここにきた。

「まだあれから一時間と経ってない、ナキリは寝なくても大丈夫なのかい？」

一時間と経っていない？

馬鹿な、私は確かに三時間は寝て、シャワーを浴びてここに来たはずだ。

「私は三時間寝て、シャワーを浴びてここにきました。時計が止まっているのでは？」

ふむ、とアスカは腕時計を見ている。

「しかしナキリ、ココノエの部屋の時計と、この時計は時刻が一致しているのだが」

私の部屋の時計がおかしい、という線が濃厚だ。

眠気がまったくくはないのは何故だろう。

「なら私の部屋の時計がおかしかったんですね。でも、眠くないんです、今は」

アスカは私を憐れむような表情を見せた。

あんな光景を見ては無理もない、大半の人間ならショックを受けるだろう、といった風な。

「私は特に、ショックを受けていないと言えば嘘になると思いますけど、大丈夫です」

だから、そんな目で見ないで。

なんだか私が、可哀想な人みたいじゃないか。

「そうか、ならいい。でもナキリ、初めて会ったときは別人みたいだったから」

アスカは悲しそうにそんなことを言って、部屋に戻っていった。

自室に戻っていくアスカを見て、私は鏡を探した。

まだ夜の闇がそこを包んでいる。

スタッフルームに姿見があるのを思い出し、手探りで歩いていく。

途中、椅子に引っかかり倒れこんでしまった。

いつも見ている風景、毎日歩いた道筋、何かに躓いたことは記憶に残っていないというのに。

姿見は窓からの月明かりで、私を辛うじて映した。

私が光源を遮る形になってしまっているので、像は暗く、アスカが見た私に近いだろう。

そこに立っている人物は私と違う気がした。

右手を上げれば左手を上げる。

左手も上げれば右手を上げる。

可愛げのない動作はやはり私そのもの、だけどなにか違う気がする。

違和感が形を持ったらこんな風に私の前に立つのだろうか。  
鏡に映る私は、どこが、ではなく全てが違和感の塊だった。

私はこんなにも冷たかっただろうか、私はこんなにも無機質だったろうか。

確かに、私はあの黒猫に会った辻堂奈霧ではないような気がする。だが、それがなんだというのだ。

思いのほかショックは大きかったのだろう、そう思うことにした。部屋に戻って寝ることも、シャワーを浴び続けることも億劫だ。臭いが戻ってくるのではないかと恐れたのかもしれない。

コーヒーを淹れて朝を待つことにした。

暗闇の中の私はまるで羽化を待つ蛹のよう。

どろどろと闇に溶け込んで、明日には別人のような私になる。

ミルクがカップでぐるぐると渦巻いている。

空が白み、体表を熱する日の光を感じる。

皮膚は焼けるように熱いのに、背筋の冷たさはいつまでも私を放さない。

はやく、ドアが開けばいいのに。

つよく、抱いてくれればいいのに。

まぶしく、笑ってくれればいいのに。

ああ、待ち遠しい、会いに行けばいい、でもそこから動けない。ここからでたら、恐怖に押しつぶされてしまう。

血と肉と糞尿の混ざり合ったなにかをいれる皮袋の群れが、否応なしに死を感じさせるのだ。

知らない人はいつ死ぬかわからない。

マスターはいつまでもそこにいてくれるような気がする。

いなくなるなら、消えてしまうような気がする。

はやく、ドアを開けて。

茫然自失とした私を、私が見ているような錯覚があり、私は目を閉じた。

この閉じた空間の、動く一切が、私に流れ込んでくるような、そんな思い込み。

「おはよう」

私は柔らかく温かい、彼女に抱かれた。

「おはようございます」

目は閉じたまま、耳朶を打つその波を私に沁みこませるように。

「コーヒーを淹れて待っていました。もう、すっかりさめてしまいましたよ」

マスターはかすかに笑い、どれ、ただこう、と、大嫌いなはずのそれを飲み干してくれた。

「まだ、温かいよ」

「ありがとうございます」

それからの時間はいつもどおりだった。

変わらない利用者、変わらない営業者。

私もいつもの私、紳士淑女の皆様はご機嫌麗しく。

抑揚のない声が店内の空気を、恐る恐る振るわせる。

そして、タチバナはやってくる。

変わらない会釈、繰り返しているという実感を私に与えるのは彼か、と思わせるような。

お決まりの席につく彼はまるでこの店の調度のように、酷く無機質だ。

私は彼にこんな印象を持っていただろうか、似ている、と感じていた気がする。

無機質だったのか、私は。

いままでの私を思わせるその真っ黒な服装は、なにを考えての行動だろうか。

あるいは、何の意味もない、ただの嗜好なのかもしれない。

彼の考えがわからない。

私達は似ていたはずだ、考えを共有できるという直感を生むほどに。

なにを考えているんだ。

私はなにを考えているんだ。

「なっちゃん、ぼーっとしないの」



マスターは右頬を膨らませ、両手を腰に当て、怒っちゃうよ、とジェスチャー。

なんだか、とても可愛らしい。

「はい、すいません、マスター」

自然と笑みがこぼれた。

「笑うなんて珍しいね」

彼女が言うのならそうなんだろう。

自分のことすら、満足に分かっていない。

私のことを充分に見てくれている。

さあ、仕事だ。

いつものように、他の利用者がいなくなるまでタチバナはそこに座っていた。

コーヒーをおかわりしながら。

タチバナ一人になって、マスター自らコーヒーを持っていってしまった。

白い封筒も一緒に。

「お待たせしております」

流石はここを取り仕切る者、仕草からなにから実に格好いい。

どこを切り取っても映画のワンシーンのようだ。

「この封筒はタチバナ様のものではありませんか？」

テーブルの上にスツと出された封筒を見てタチバナは即答する。

「ええ、僕が置いたものです。まさか戻ってくるとは思っていませんでした」

マスターの空気がちょっとピリピリした感じになった。

「ほんの好奇心、と言っても信用はされなさそうですね」

タチバナはマスターの緊張を見て取ったのか、席に着くことを促した。

「辻堂さん、よろしければ水を用意していただだけませんか」

私は彼に言われるままに水を用意し、クローズドの札をドアに掛けた。

「先に勘定を済ませておきましょう、そのほうがお互いにとって、きっと良いでしょうし」

私は清算を済ませ、マスターの後ろに寄り添うように立った。マスターはもう主人としてではなく九重権として会話を進める心積もりのようだ。

「この手紙は誰に宛てたもので、どんな意図があったのか訊きたい」  
タチバナはコーヒーを飲みながら答える。

「この手紙は辻堂さんに宛てたものですよ、意図、と言われると困ります」

一呼吸、またコーヒーを一口。

「好奇心、と言えば適切な表現になりますか」

そんな不明瞭な答えで納得できるはずもない。

まるでその時刻になにがあるかを知っていたかのような文脈に対して、明らかに説明不足だ。

「まるでお前はあそこでなにが起るのか知っていたかのような文脈だ。そこが知りたい」

マスターはいつになく喧嘩腰な口調で言った。

「なにかあったんですか？」

白々しい、でなければあんなにも正確な時刻は表記できないだろうに。

お前には理解できるかどうか知らないが、と言い、マスターは簡潔に夜のことを説明した。

そうですか、と男は呟き、とんでもないことを言い出した。

「私は最近、翌日の夢をみるんです、いつもはそれが誰のものかはわからないんですが」

偶然、昨日は辻堂奈霧のものであったらしい。

当然、手紙を見つけたところも、その手紙のイニシャルが自分のものであることも。

その夢に沿って、昨日のタチバナは行動したという。  
なるほど、彼は未来が見える、ということではないのだろうか。

「今日は、初めて自分自身の夢を見ました。その中で、たぶん私は死んでいた」

今、こうやって話していることも、完璧に夢のままだと言う。

私は今日を変えるべきかそうでないか、迷いながらも、その時を迎えるしかないのです、と。

「遠いところに逃げればいいじゃないですか」

即座に否定の言葉が返ってきた。

「こんなにも日常からかけ離れていることの為に？」

その通り、ただの夢の為に他の一切を調整するなど、常人では思えないだろう。

マスターや私、アスカならともかく、だ。

それに、と彼は付け加えた。

「夢が本当なら、この店を出たところで、私は死ぬんです」

正夢が一度あったから、と、自分の夢は予知なのだと信じる人はいないだろう。

自らが死ぬとなれば、ほとんどの人は馬鹿馬鹿しいと笑うと思う。

「僕は確かめたいんです、夢は本当なのか、嘘であったなら、僕は心から笑うでしょう」

マスターは大人しく聞いていたが、なにか気になる場所があったようだ。

「タチバナ、君はどんな風に殺されていた？」

彼はしばらく考え込んでいたが、わからない、と首を振った。

「本当に死んでいたのか、それともそこで目が覚めただけなのか、わからないのか？」

彼は少し震えている、思い出したくないことを思い出しているのかもしれない。

「わかりません、胸の辺りに衝撃を受けて、倒れたところまでは見ました」

いままでにない喪失感は、死の感触だ、と実感したらしい。

「では君は死んだのかどうか判らないが、死んだと実感をもったわ

けだ」

彼はただそこで目を覚ましてしまっただけかもしれない。

私はそう思うし、私が夢を見ていたら、きっとその夢をなぞってみたいと思うだろう。

本当はどうだったのか、確かめなくなる気持ちはよくわかる。

でも、確かめたらきつと死ぬ。

彼の胸には大穴が開き、彼とまったく同じ姿の人影が笑っている。黒のコートを着た男、彼そっくりの別人、散弾銃を片手に笑っている。

飛散した彼の体は店の床や壁をことごとく汚ししていく。

「誰に殺されたのか、タチバナさんは心当たりありませんか？」

そう、きつと貴方にそっくりな、黒いコートを着てる人。

なぜだかそんな確信があった。

「僕は少しおかしい、だけど普通の人間です。殺されるあてなんて見当もつかない」

彼は普通の人の何倍も落ち着いた口調で言った。

それは死を目前にした人間が、恐怖ではなく諦めを感じるように。

「きつとタチバナさんそっくりの人、本当に心当たりはないですか？」

彼はゆっくりと首を横に振り、それを否定し、冗談のように言った。

「自分そっくりの誰かに殺されるなんて、ドッペルゲンガーの迷信みたいですね」

自分の分身を見た人はその分身に殺されるという比較的有名な噂。

でもなんとなく、それであっているような気がした。

「なっちゃん、どうしたの？」

「なんのことです？」

マスターは私に違和感を感じたようだ。

私にはなんのことだかさっぱりわからない。

「私、どこかおかしいですか？」

いきなりマスターが抱きついてきた。

ふざけた素振りなんて欠片もない、真剣に私を案じてくれているのだと感ぜられる。

「マスター、少し怖いですよ」

いつも冗談みたいな人だから、その真剣さが少し、怖い。

仕事してるときとは違う、心の冷たい部分がでてきているみたい。体は温かいのに、背筋はぞくりとする不思議な感触。

「昨日から、おかしいと思ってた。なっちゃんじゃないみたいなの、そんな気がしてた」

マスターの心臓の振動が伝わってくる。

「そんなことないですよ、私はいつもの私です」

なんの根拠もなくそう言って作り笑い。

「マスターこそ、そんなに真剣な顔、別人みたいですよ」

私が変わったのか、それとも彼女が変わったのか。

あるいは、両方か。

「タチバナさんはこの店を出たところで撃たれます」

平然と、私は直感を口にした。

クジを引いたときに当たるという確信がもてることがあった。

今もそうだ。この直感は外れない。

マスターの腕がぎゅっと私の体に食い込む。

「タチバナさん、私の夢はまだ覚えていますか？」

あの夜、私は倒れる前に声を聞いた。いや、最後になにか言っただけなのだ。

「私が最後に口にした言葉、倒れた後の光景まで見えましたか？」

アスカが元に戻った原因があるとすれば、それは手紙のあの言葉。私が口にしたのか、他の誰かの言葉なのか、私の言葉であればそれはなぜか。

「僕の夢はあの手紙の一節を口にしたところで終わっていましたよ」やはり、あの言葉は私のものだった。

でもなんで私の言葉でアスカは元に戻れたんだろう。

「マスター、彼を守ることは出来ますか？」

彼があ言葉についてなにか思い出すことができたなら、私の疑問も解けるかもしれない。

この店から出たところで撃たれ死ぬのなら、この店には彼を殺させないなにかがある。

ここにいるだけで彼は救われるかもしれない。

「マスター？」

私を抱いていた彼女は、いつのまにか、震えながらしがみついていた。

本人も気付かないほど小さな震えだったけど。

まるで大切な誰かを引き止める子供のようだ。

「らしくない、ですよ、お互いに」

アスカがいれば、彼を守れることもできるかもしれない。

できれば、目の前で人が死ぬのは見たくない。

見えてなければいいのか、と自分でも思うのだが。

「タチバナさんは、死にたくないですよ？」

「ええ、もちろん」

当然、彼も公衆の面前で肉の塊になりたいなんてことはないだろう。

「マスターしっかりして下さい。弾丸は当たらないでしょう」

なにを怖がっているんだろう。

「うん、わかってる、わかってるんだけどさ」

歯切れの悪い言葉はまるで別人のよう、いつだって自信たっぷりな人なのに。

「なにを怖がっているんですか？」

ああ、そうか、変わってしまうことが怖いのか。

私がこんなにも冷徹に、人の生き死にを語るなんて、いままでになかったことだ。

やんわりと、あるがままに、生きていけば幸いです、と命について語った私は欠片もない。

「私が怖いんですね、私を嫌いになりましたか？」

一度あの臭いを覚えてしまったら、命とは始まりから終わりまで凄惨なのだと感じる。

情け容赦ない瞬間こそが、命の本質だと。

私もその、情け容赦ない人間なのだ。

なのだが。

「私はマスターのことが大好きですし、尊敬しています。だから、しっかりしてください」

どうしても、九重権を失うことは考えたくない。

日常だから？

過去と繋がるために必要だから？

本能？

自分を観察する自分に嫌悪感を抱く。

私の額をマスターの額にゴツツと当てる。少し痛い。

マスターは呆氣にとられたような表情をしながら額を撫でる。

「そうだね、らしくなかった。タチバナを守るくらい、わけないさ」

マスターはやっと私の体を離れ、彼に向かって言った。

「おそらく、銃声が聞こえればアスカが飛んできてくれるだろう、それまでもてばいい」

彼女はまだ幾分か熱が足りない様子ではあったが、調子が戻ってきたようだ。

私達はそのまま店の外を見渡し、不審な人物がいなか確認する。何一つ不審なもの、不審な人物、不審な挙動は見られない。

通りは平静そのもので、いつもより穏やかに見えるほど。

いつ見たのかもしれない通行人を眺め、既視感と第六感が混ざり合うような吐き気を感じた。

まるで毎日が超常識の日常であったような、意識の底が揺れるような感覚。

吐き出される息がやけに苦くて、口の中には変な薬品でも飲んだような味がする。

その味は苦さと無味の中間のような、不快でないのに不快、いや、確かに不快なのだが。

食道から吐瀉される瞬間を待つ様々なものが胃の少し上で燻るよううで、むかつく。

背筋は体とはなにか別の、ガラス棒を突っ込まれたような冷たさが奥歯を微かに震わせる。

「なっちゃん、どうしたの？」

マスターは私の異常に気づいたようだ。タチバナは冷静に辺りを見回している。

「なんでも、ないですよ、はは」

作り笑顔も作れない、笑えない、まるで人形だ。

視界の黒点が増え、拡大し、全てが暗緑色を帯びた黒に染まっていく。

「彼そっくりの人間が彼を殺すのではなく、彼が死ぬことによって、それは彼になるんです」

私は膝を折ることで緩やかな転倒を選択する。

かなりの痛みと音を伴うであろうそれは、何かに触れた、ということしか感じられなかった。

もっとも、完全に倒れるまでにマスターに支えられていたのだけれど。

「ありがとうございます」

私の言葉は耳からは聞こえず、頭蓋を叩くその反響なのだろう、こんな声は知らない。

低く、こもった声。

マスターはブリオニアを模した袖ボタンを一つ千切り、タチバナに投げて渡した。

「これは？」

「それを放すな、なんなら飲み込んでもいい。お前は男だが、死にはしないだろう」

苛立ちを含む声、その声は早く行けと叫び、列を乱す横暴な人の



よう。

マスター、急いでも、変わるのとはあなたの心だけ、もっと綺麗なまままでいてください。

相変わらず体は動かず、こんなことを考える部分だけは活発だ。

「早くしろ、これ以上私は待てない」

なにが待てないというのか、進展も後退も停滞もない毎日を送るのが私達だというのに。

いままでとなにひとつ変わらない日常を望めばいいのに。

真っ暗な中、物事は進んでいく。

ドアが開く、聞きなれた音。

爆発する、つい最近まで聞いたこともなかった音。

とても大きな音、とても小さく感じた音。

目覚ましの何倍も騒々しい音が、危険だと告げている。

さっきまでの暗闇が嘘のよう、視界は晴れ、体も動かせる。

立ち上がり、タチバナの様子を確認する。

彼はまだ元の形を留めている、なにを思ったのか、彼はそこに立ち尽くしている。

助けられるのは今この瞬間をおいて他にはない。

私は走り出す、そこに辿り着く時間は何秒ほどだろうか。

三秒、五秒、私はタチバナを突き飛ばし、彼に覆い被さるように倒れた。

ガラスや木の破裂音が聞こえ、破片が飛び散る。

早くここから逃げないと、あんなにも生々しい死に方を見られるなんて耐えられない。

想像も出来ない痛みや苦しみなんかよりも、大切な人に嫌悪されることのほうがずっと怖い。

タチバナはどこかぶつけたのか、気を失っているようだ。

ドアの外にはタチバナそっくり黒コートが銃を片手に、にやりと笑っていた。

「外したか」

男の声はタチバナそのものだった。

タチバナを店の奥へ引きずる。

脱力した人間は私がいままで持ったなによりも、重く感じた。

男は平然と弾を込めなおし、構えた。

マスターが男の前に立ち塞る。

「うちに何の用があるのかしらないけど、店の修繕はあんたにやっ  
てもらうからね！」

男は返事をする代わりに発砲してきた。

今度の音は大きい、鼓膜だけでなく頭蓋までも振るわせる空気の  
振動。

「微風よ」

しかし僅かにずれれば彼女の頭は無くなっていたのではないか。  
込められた弾丸は店の外壁を貫通する凄まじい威力、飛び散った  
瓦礫が当たりそうになる。

マスターはゆっくりと彼に近づいていく。

彼はそれに合わせ少し下がりがら弾を装填する。

「俺はアイツが殺せればいいんだが、大人しく引き渡す気はないか  
？」

「どんな理由で殺したいのかは知らんが、戯言は店を直してからに  
してもらおう」

私はドアの影に身を隠しながら二人の様子を確認する。

まだアスカは気付いていないのか？

タチバナはまだ目覚めていない、なにを呑気に寝ているのか。

「起きて！」

タチバナの肩を揺する、頬を叩く、三度ほど叩いたところで反応  
があった。

「ん……生きてる？」

「そう！ あなた生きてるんだからもうちょっとしっかりなさい！」  
突き飛ばした手前、打ち所が悪かったらどうしようかとも思った。  
「このマスターキーあげるから、裏口から二階の部屋に上がって

隠れてて」

ポケットから鍵を取り出し、タチバナに握らせる。

「裏のドアを出て左の階段から上がって、そこにいる人に助けを求めなさい、早く！」

背中を叩いた音は銃声にかき消された。

タチバナが裏口へ走っていくのを見届け、マスターの様子を確認しにいく。

通りから悲鳴すらあがることはなく、通行人は全くいなくなっていた。

そんな中、二人は距離を測り、微動だにしない。

複数人が通報していてもおかしくない状態、警察はまだこないのか？

「あんた、銃弾が当たらないとかふざけてるな、これでも射撃は得意なほうなんだぜ？」

男は笑いを堪えるように言った。

「真昼間からこの平和ボケした国でショットガン乱射してる人間がなにを言うか」

マスターの反論は私も賛成するところだ、ふざけている。

「サツが来るのなんか待っても無駄だぜ。根回しはしてあるからな」

「あいにく、そんなものは当てにしていない。私が当てにしているのは彼女だ」

マスターの視線が男から僅かに外れる。

男はそれに反応し、視線のほうへ銃口を向けながら横へ飛ぶ。

跳躍の合間にアスカを確認し、発砲できる辺り射撃が得意だというのは本当なのだろう。

転がる間に弾丸を装填できる辺り只者ではないのかもしれない。

しかし、アスカの動作速度は男を凌駕していた。

二発目を撃とうと構えるが、その手に銃は無く、アスカが後頭部にそれを押し付けていた。

「構える瞬間に手から離れていた。動かないほうがいい、私には躊

躊躇いはない」

その動きはまるで出来の悪い映画のように、いくつかのコマが飛んでしまったように見えた。

男は両手も上げず、口笛を吹いた。

「これじゃ俺はとんだ間抜けだな。だが、あんたの相棒は躊躇うみたいだぜ？」

言うなり男はその場で側転をするような格好で銃を蹴り上げた。

一瞬の躊躇い、空へ向かって打ち上げられる銃弾。

「はっ、間抜けが！」

アスカは銃を遠くへ投げ飛ばし、彼に襲い掛かる。

「見えてるんだよ！」

男はアスカの拳をかわす、反撃の拳はむなしく空を切る。

アスカの移動が早すぎたため拳を待たずに通過してしまったのだ。

「化け物め」

私とマスターは遠巻きに見ていることしか出来ない。

「私の動きについてくるあたり、君も十分、化け物だと思いがね」

アスカは立ち止まり、右手になにか、やや小さなフィルムケースのようなものを二つ。

「これに見覚えがあるだろう。これは自慢だが、こんなこともできる」

一つを水平状態で落下させ、落とした手のひらで弾くように叩いた。

男にはなにが起るか予想できたのか、横に飛んで死を回避した。向かいの窓ガラスなどはまとめて割られ、アスファルトには火花が舞う。

「バレルがない分、実用的とは言えないが」

男は呻き声こそあげなかったが、左半身にはここからでも分かるほどの傷があった。

コートにはところどころ穴が開き、赤黒く光るものが滲んでいる。「ゲームセットってわけだ」

傷のためか立ち上がることもすままならない。

それでも男は諦めてはいない、そんな目をしている。

「私はこんな風だが、私達は殺し合いなど望んでいない。場合によっては病院まで送ろう」

嘘か真か、アスカはそんなことを口にする。

「俺はあの男を殺したいだけでね、差し出してくれるなら店をもう一軒建ててやる」

男の口数が増えてきた、今なら交渉できそうだ。

マスターもそう思ったのか、男の五メートル手前ほどまで近づく。私はその後ろに隠れるようにして話を聞いていた。

「誰に頼まれてあいつを殺しにきた？」

男は、まるで見当違いだ、と笑っている。

「むしろ、俺があいつを探させただけだ。情報料はなぜかタダだったがな」

「マクガフィンか？」

「フン、あいつら絡みか、気に食わねえとは思っていたが、化け物つきとはな」

「君のような人外に言われるとは思わなかった。彼らの条件は？」

よくわからないが、マクガフィンとは団体の名称らしい。

「あの男を絶対に殺せ、だと。そろそろ血がやばいんだが病院はまだかな？」

確かにかなりの血が流れているように見える。

「口の減らない男だ。場合によってはと言っただろう。そのナイフを手放してもらおう」

男は地に付いた左の手のひらと腕によって、私達の死角にナイフを隠していたようだ。

十センチほどの小さなナイフではあったが、彼の動きなら充分に人を殺傷できるだろう。

右手がずらされ、ナイフをこちらに滑らせてくる。

「これでいいのかい？」

アスカの周りの空気が揺れながら盛り上がるような、そんな震え方をした感じがした。

「これが最後だ。ナイフを手放せ」

男のベルト、背面部分から刃渡り二十センチはありそうなコンバットナイフがでてきた。

丁寧に磨かれたそれは肉食獣の爪か牙か、殺すものでありながら、生きる象徴にも見える。

「それが君の切り札か。それを手放し、もう殺しはやらないと約束するんだ」

ほらよ、とナイフをこちらに滑らせてきた。

まだなにか隠しているのではないか、そんな考えが生まれてくる。アスカは動かず、呟く。

「もう、殺しはしない、ただ、それだけのことだろう」

どこか自嘲めいた響きだった。

「いてえ、畜生。そんな約束守れるわけねえだろう。」

なぜ、守れるわけないんだろう。簡単なことじゃないか。

「なんでそんな簡単なことも守れないんですか？」

私は思わず口をだす。

「はん！ てめえはいままでどんだけのものを踏み潰してきたのかわかってんのか！」

男は平静を保つのが難しい状態になってきたのか、上ずった声で答えた。

「答えになっていませんが、生きることとは殺すことだという返答でよろしいですか？」

質問で返されたからには解釈を確認しなければならいだろう。

広義で考えるなら私達は日々様々なものを殺して生きている、確かにその通りだ。

「意外に子供なんですね」

屁理屈もいいところである。

「俺は約束しねえ、だがこのまま死んだらお前たちが殺したんだ！」

そう言つて男は氣を失つた。

中腰に保たれていた体は崩れ落ち、勢いよく地面に当たった肉体が音を鳴らした。

私は駆け寄る。

お前たちが殺したんだ。

その言葉が、いやな感じに背筋を震わせたから。

助けなければと思った。

それは贖罪か、それとも罪から逃れる逃避なのか。

マスターがなにか叫んで私に飛びついてきた。

私は叫んでいた。

「死んじゃう、死んじゃうんです！」

私は抱きしめられ、宥められていた。

「大丈夫、大丈夫だから、アスカが運んでくれるから、大丈夫」

マスターはゆっくりと言葉を選ぶ、温かさと伝わってくる鼓動が私を落ち着かせた。

「アスカ、大丈夫？」

「少し服が汚れた。すまないな」

「いいよ、その男に払わせるから、でも、これでしばらくお休みね」  
とても残念そうだ。

「落ち着いた？」

マスターが私の頭を撫でながら訊いてくる。これじゃあまるで子供じゃないか。

「はい、すいません」

「私はこれを医者にもっていつてくる」

アスカは男を抱えて跳んだ、走るというよりも路上を跳ねるといった移動法、速い。

一度の跳躍で二十メートルくらい移動しているように見えた。

すぐに視界から消えてしまったけれど。

「マスター、お店、どうしましょう」

ドアは半分無くなって、外壁にも大穴、食器は割れ、家具もいく

つか駄目になっている。

「言ったでしょ、お休みだって」

こうやって、私の毎日は昔になっていく、ああ、なんだかなあ。

「でも休む前に片付けないとね、ほら、業者の手配するからなっちゃんとは細かいのよろしく！」

私の背中を勢いよく叩いて中に走っていくマスター。

「ずるい！ マスターも手伝ってください！」

なにか忘れているような？

「ああ、すまない、堺町はこっちでいいのかな？」

道を尋ねたのは私、怪訝な顔で迎えてくれたのは赤の他人だ。

私とて好きでこんなところに来ているのではないのだが、いや、やはり好きで来ているのか？

この国の公僕は平和ボケしている上に個性をもっているという体たらくだ。

地図を挟んで話をしているというのに私の体を猜疑心まるだしで観察してくる。

こんなところだけは律儀に並列化しているし。

嘆かわしいことだ。

「……………ですから、まずあちらに向かってください」

嘆いている間に説明が終わってしまったようだ。

嘆くしかない。これで五度目だ。

無遠慮な視線で精神を汚されるよりはここを離れたほうが幾分か救われる。

「どうもごくろうさま」

礼を言ってその場を離れる。

駅内で迷っているとところを公僕に見咎められてから、はや一時間。駅に併設された詰め所で五人目の公僕に説明を受けたのだが、どうやら失敗だったようだ。



土地勘のない場所で地名やバス停などを指標にされてもさっぱりわからない。

できるだけ暇そうな、かつ善良そうな市民を捕まえて訊くことにしよう。

まばらだが、人がいないというわけではない。周囲にいるのは善良そうな市民ばかりだ。

「道を教えて欲しいのですが」

分かる範囲でなら、と、短髪の青年は答えた。

私の日本語を聞いて安心したようだ。

やはり、最初からこうするべきだった。

遠慮がちに話しながら、地図に線を引いてあちらのほうへ。

私は忙しいんだ、なんて空気を自慢げにまもっている公僕など比べ物にならない。

説明は稚拙だったが、逆に可愛らしいものだと思えた。

「ありがとう」

私はそう言って彼に別れを告げた。

線引きした地図を頼りにとぼとぼと歩く、なんで私はこんなところにいるんだ。

それというのも教え子から助けを請われたのが原因なのだ。

いつもいつもトラブルを巻き起こし怪我をしては私に治してくれという。

他の生徒は私に近寄ろうともしないのに、一人だけ懐いてきた。

ただそれだけなのだが、何故か堪らなく大切なのだ。

まったく、迎えにも来ないとはどういうことだ。

ふむ、また角を一つ過ぎて曲がってしまったようだな。

考え事をしていると他の物事が見えなくなるのは悪い癖だ。

大して困った記憶もないので直す気はさらさらないが。

しかし、目的地までの距離が伸び続けるのはいただけないな。

ああ、この角を曲がるはずだったんだな。

初めての町、ビルばかりで同じところを歩いているような、そん

な錯覚を感じる。

レンガの歩道の隅には空き缶やタバコがところどころに見られる。こんな目印など残さずとも迷いはしないだろうに。

それとも、住民をもってしても迷うという魔窟の類なのだろうか。おっと、また行き過ぎるところだった。

すれ違う人は皆、早足で、それでも、私が珍しいのか一瞥し、歩み去る。

「探しましたよ、ドクトル」

「ハカセ、と呼ばたまえ、簡略にして敬称という素晴らしい呼び方だ」

「一音だけでしょう」

「語尾が延びるだろう、それはそうと、旦那に怪我でもさせたのか？」

彼女はアスカ・シニフェ、私をここに呼びつけた大切な元生徒だ。抱えている男は誰か知らないが。

非合法組織で働いているらしいが、過ぎた月日に感慨もひとしおといったところ。

「これは違います、私の好みは別にいるので。来て早々悪いのです。が治してください」

これ呼ばわりか、心底どうでもいい存在なのだろうな。

「君は私の専門を知って人体の修復を頼む唯一の人間だよ」

男の左半身には銃弾と思われる金属片が四発めりこんでいる。

肩、腕、腹、足、まずはその消去。

傷口は彼の細胞をもってきて塞げばいいだろう。

「こんなものでいいだろう」

傷口を確認して、一ヶ所づつ塞ぐ、時間は二分ほどだろうか。

「さすがハカセ、一歩間違えば全能ですね」

「おだててもなにもでんぞ、あと、血液は流石になかったからすぐ病院にもって行け」

点滴や輸血を行わなければ男はおそらく戻ってこれまい。

「わかりました。私の足で五分ほどなので十分ほどこで待っていてください」

全く勝手なやつだ。

「変わらないな、では私はここで手品の真似事でもして遊んでいるよ」

「騒ぎは起こさないでくださいね」

そう言って男を運び去る突風。

騒動はあれの専売特許だろうに。

暇をもてあました私は面白そうなものを探し始める。

これなど良さそうだな、子猫を捕まえて肌に伝わる温かさと命を観察する。

波打つ体、骨と皮、手触りのよい毛を掌に感じる。

たまたまその瞬間を目撃した数人が目を丸くしていた。

子猫などいかなかったのに、という風に。

白黒の虎のような模様をした猫、小さな、まだ柔らかい爪で私の手を引っかいている。

しばらくすると慣れたようで、やや長めの尻尾をゆらゆらと動かす以外は大人しくなった。

立っているのも疲れたので適当に座れるようなもの、ああ、このソファなんていいな。

ソファに座り、猫を撫でながらアスカを待つ。

通行人の顔が驚嘆ではなく懐疑の顔に変わっていく。

いつだって私は変人扱いされる。彼らは一生この技術に辿り着けないだろう。

私はあくまで科学の徒なのだが。

変人扱いされるのはなにも一般社会においてのみではなく、私の研究室でもそうだった。

実験が終わるころには実験器具がなにかしろ増えているという怪現象が頻発するからだ。

しかも、私が関わったもの全てで。

彼らはその実益を無視して、ある者は気を病んで出て行ってしまった。

そんな風に、いつだって一人だった私は、窓を割って入ってきた怪我だらけの女を修復した。

それは初めての試みで、医学的な知識を必要としない修復であったのが救いだった。

彼女の左腕は吹き飛ばされていたが、時間が経っておらず、腕を繋ぐだけで事足りたためだ。

もし、輸血が必要であったり、別の要因があれば彼女はいまごろ土の下だろう。

あれから医学書を読み飛ばし、知識を増やしたが、彼女がいなければそれもなかっただろう。

ん？ あの時、助けなければ私はここにいないくて済んだのか？

しかし、それはいくつかの研究成果を放棄せざるをえない考え方だな、と思い直す。

私は彼女を助けて正解だったのだ。

「……トル……あ、そうか、ハカセ！」

なにやら呼ばれたようだ、猫の体のことや昔のことが吹き飛んでしまった。

「誰だ、私の観察を邪魔するのは」

そこにはやれやれ、と肩をすくめるアスカの姿があった。

「なんだ、もう戻ってきたのか」

「もう、じゃないですよ、二十分はかかってるんですから、急いで戻ってきたのに」

医者に関係はどうだの連絡先はどうのと聞かれて遅くなったそうだ。

「ハカセは変わらないですね、見た目も三十超えてるようには見えませんし」

「そうか、変わらないか」

私はあの頃と変わらないらしい。

赤髪の長髪、痩せすぎているというほど細身の女、浮いた話もない鉄の女。

「変わっていて欲しかったか？」

「いいえ、私はあの時のハカセが好みですよ」

彼女の好みは理解できない。

孤独を愛する人を愛するというか、孤立したものに執心のようだ。何処がいいんだか。

「それはそうと、もう歩くのは疲れたから店まで運んでくれ」

もう一度、やれやれ、と返してくる。

次の瞬間の私は風の中にいた。

「軽いですね」

なんて呟く、しなやかで奔放な暴風の中に。

「手を切らないように気をつけてやってね、私は警察まで行ってくるから、あとよろしく！」

と、マスターはタチバナをつれて事情聴取に出かけてしまった。

残された私はドアの無くなった店内の見張り番といったところ。

散らかった店内は始めの数分、私を石化させたり右往左往させたりしたが、綺麗に片付いた。

壊れている、必要ない、割り切ってしまうえば普段の掃除と何も変わらないと気づいたためだ。

それでも、お気に入りのマグカップが割れたのには少々未練が残る。

あの黒コートが戻ってきたら、きついお灸をすえねばなるまい。

しかし、彼はなぜタチバナを殺すことに執着したのだろうか。

個人的な恨み、しかし、タチバナ本人が知らないといっている。

タチバナが情報を隠している線もなくはない。

表に出せないような秘密は誰にでも一つくらいあるものだ。

逆恨み、というのもありえなくはない。

しかし、怨恨の元となるものがあるならもつと感情的だろう。

この線は薄いな。

彼はタチバナを探させたと言った、ならば二人の関係は至極希薄なのではないか？

居場所も特定できない、しかし知っている、インターネットとかそういうものだろうか。

匿名性の高い場所でトラブルがあり、それが今回のように発展するケースもあるらしい。

わざわざあそこまでの武装をして警察まで抱き込むほど本格的に発展することは考えにくい。

やはり私には理解できない彼なりの事情というものがあるのだろうか、理解不能だ。

「ふむ、ドアがないとは斬新な喫茶店だな。他にないのではないかな？」

年齢を感じさせる落ち着いた女性の声で、私は空想から引き戻された。

「ハカセ、さっきまではあったんですよ」

「なんで外したんだ？ 夏は暑いし冬は寒いし、良いことはないだろう」

アスカが帰ってきた、お姫様だっこで女の人を抱えている。

赤毛の女性、顔立ちは美しいが酷く痩せていて精彩を欠く。

白のブラウスに灰色のカーディガン、足首まで届くほど長い黒のタイトスカート。

お姫様というよりも女教師、といった感じを受ける。

「おかえりなさい。そちらの女性は？」

「ただいま、紹介しよう、コートランド・アポクリフ博士だ。私の先生だよ」

女性を支えて立たせながら、答えが返ってきた。

「はじめまして、辻堂奈霧です」

私から握手を求めてみる、慌てて手を握るのはもう嫌だ。

「私を呼ぶときはハカセでいい。よろしく」

握り返してきた彼女の手は酷く冷たく、震えてしまいそうだった。

「コーヒーでも飲みませんか？ あったかいやつ」

きつと寒かったんだろう、私なりに歓迎の意を表に出してみる。

「ただこう」

二人は席に座り、私は厨房でコーヒーとケーキの準備をする。

「そういえばココノエはどこ行ったんだ？ まさか逃げた？」

「マスターは警察まで事情の説明に行ってます。しばらくかかりそうですね」

銃弾も当たらないような人間が誰から逃げる必要があるのか、それはすごく気になるが。

「奴は余程私が怖いと見える」

ハカセが意味深なことを呟く、この人もやっぱり怖い人なのだろうか。

「あの男はどうなったんです？ 病院もあんなの受け入れてくれなかったでしょうに」

あんな助かりそうもない患者を病院が受け入れるのかがまず怪しい。

おまけに物騒なコートの裏側だ、拒否されても不思議ではない。

コーヒーとケーキを二人の前に並べ、私もコーヒーを啜る。

「武器の類は剥いだし、傷はほとんど治してもってったから引き取ってもらうことはできた」

アスカは平然と言い放つ。

傷を治した？ 一体誰が？ この短時間で？

「修復したのは私だ。意識の回復と輸血は病院まかせだがな、ん、うまい」

ハカセのケーキはビターチョコのパウンドケーキ、ブランデーも少し混じったやつ。

コーヒーも併せて、気に入ってもらえたようだ。

アスカのケーキはレモン風味のマドレーヌ、紅茶のほうがあうと

思っただけどコーヒーで。

マドレーヌを二口で食べてしまい、コーヒーに移るアスカ、この食べ方なら気にもなるまい。

「あれだけの傷をこの短時間でどうやって治したんですか？」

「分かりやすく簡単に説明するなら、そうだな、足りないものをそのまま詰め直した、だな」

余計に分からなくなった。

腕を組んで唸りはじめるが早いか、ハカセはこう言った。

「アスカ、彼女は入門者ではないのか？」

入門者？ なんのことだかさっぱりだ。

混乱し始めた頭が混迷を深めていく。

「彼女はココノエが雇っているウェイトレスです。気に入ってはいませんが、違うでしょう」

「二人だけ納得してないで、私にも分かるように話してくれませんか？」

ハカセはふむ、と一息ついたが、どうも回答をくれる気はないらしい。

「基礎がなければ説明のしようがない。アスカ、適当に話してやれ」  
ハカセはそのまま窓の外を向いてコーヒーを飲み始めた。

「ドクトルにも困ったものです。どこから話しましょうかね」

「ハカセ、だ。簡略にして敬称を兼ねる素晴らしい言葉だ」

アスカはハイハイ、と軽く受け流した。

「これは……見たほうが早いかな。ハカセ、さっきのケーキ私にもいただけませんか？」

「ふむ、そういうことか、だが実感と理解は別物だぞ」

ハカセは気だるそうに視線をテーブルに移す。

「これでいいんだろう、なかなか美味かったがお前にはわからんだろうな」

私がさっき出したパウンドケーキが、そこにあった。

「あれ？ さっき食べてましたよね？ 手品？」



ハカセはほらみるとアスカに噛み付いた。

「ナキリ、落ち着いて見るんだ。皿も二枚あるだろう」

言われてみればその通りで、食べかけの皿と、食べる前の皿が一枚づつ置いてある。

「説明してもわかるまいよ、私が起こしたアクションは見る、ということだけだ」

「納得できた？」

無論、納得などできるはずもない。帽子から出される鳩のような気持ちだ。

掌の上で見せ物にされるような気持ち。

「ばかにしてますよね？」

「ハカセはそうかもね、でも私には説明できる言葉がないんだ」  
アスカは拗ねた私を見て少し困った顔をした。

「少なくとも、世に流れている常識の大半は時代遅れってことだけわかってもらいたいな」

「二つ目はそこにあったってことですか？」

ハカセがおお、と感嘆の声を漏らした。

それは馬鹿にでも理解できることはあるのだな、のような気がして複雑な気分だった。

「ハカセは見ただけ、増やしたとは言っていない。ならば必然、そこにあったんでしょう」

私は言葉尻をとる子供のようない意見をもっともらしく言ってみせた。

「うむ、日本語とはやはりそうでなくてはな」

「どうということだろう。」

「ハカセも言葉遊びが好きですね。そんなところも昔のままだ」

「言葉の裏、真意を推察してこそ日本語というものだ。脊髄反射の聴覚反応では面白くない」

言葉から状況に付随する第二、第三、あるいはまったく別の意図も読み取るってことかな。

「ハカセには恋人とかできそうにないですね」

アスカの動作がビクリ、と石像のように止まったかと思うと、空気が妙な冷気を帯びた。

「どうせ私は独り者さ」

ハカセがテーブルに突っ伏して泣き始めた。

「すいません、そんなつもりじゃなかったんですけど、気に障ったのなら謝ります」

「本当のことだからな、アスカがいなければ今も一人で研究室の一部だった」

どうやらハカセは酷く寂しがり屋の一面をもっているようだ。

「ようっ、おまたせ！」

どうやら我等が九重店長のおかえりのようだ。

「おかえりなさい。マスター」

ドアのところでお出迎え。

疲れた疲れた、と肩や首をしきりに動かすマスター。

「おかえり、ココノエ」

ハカセはまだ突っ伏したまま不貞腐れている。

「げ、まさかその、ほの赤い毛玉は……」

二歩ほどあとずさるマスター、なにがそんなに苦手なのだろうか。

「ハカセさんらしいんですけど、お知り合いなんでしょう？」

「アスカが呼んだの？」

なんだか、なんで呼んだのよ、と言わんばかりである。

「怪我したりしたらいろいろ便利だから、帰ってからすぐ呼んだんだ」

「あの時間に起こされてこの人が文句言わないのはアスカくらいなものだよ」

アスカとは仲がいいけどマスターとは今ひとつなんだろうか。

確かにあの知識の溝は深そうだなあ。

「ほら、ハカセ、ココノエが戻ってきましたよ。仲良くしてくださいよ、まったく」

ハカセもわりと真剣に泣いていたようで顔が真っ赤になっている。  
「うむ、ココノエ、仲良くしてやる。コーヒーおかわり」  
「はぁ、このカフェイン中毒が、次からはお金取るからね」  
なんて言いながらも厨房へ行くあたり、さほど仲は悪くないのか  
もしれない。

「私も手伝います」

マスターはうん、と少し寂しそうに頷いただけだった。

「どうしたんですか？」

聞きながらケーキを皿に分けていく。

「なにが？」

「マスター、なんか寂しそうですよ」

「そんなこと……ないよ」

作り笑いもでてこないらしい。

話題を変えてみるか。

「マスターはハカセがどうやって物を増やすのか知ってるんですか？」

「理論は聞いたけど、あれはハカセだから増やせるんだよ」

「どういうことです？」

マスターはコーヒーを、私はケーキを運びながらそんな会話を続けた。

「例えば、アスカなら運動エネルギーが及ぼす結果をある程度改変できるんだけど」

「運動エネルギー？ 改変？」

「エネルギーに干渉するんじゃないで、結果に干渉するんだけど、なんて言ったらいいかな」

全員分のコーヒーをテーブルに並べながらマスターも少し困った顔をした。

そこにアスカが助け舟を出してくる。

「ボールを蹴ったとして、蹴る瞬間までは変わらないんだけど、飛んでいく速度が違う」

「超能力ですね」

「大多数の常識からいうとそうだな。ハカセのも似たようなものだ」  
ハカセはコーヒーを一口含み、不機嫌そうにそれに応えた。

「超能力ではない。正真正銘、科学の産物だ。私が望まないから常識にならないだけだ」

あと、と付け加えられる。

「干渉はしない。あくまでも認識するだけだ。理論を実践する自分を創れば誰にでも可能だ」

公表すれば世界は滅茶苦茶だろう。超能力が常識だなんて考えたくもない。

「でも、常識になっちゃって世界もあるのよね」

マスターが反論する。

「少数ではあったけど、オカルトな能力を持ってた人間は確かにいたし、常識だった」

「私は流していないぞ、生来から素養のあったものの集団だろう」

「超能力ってあとから身につくものなんですか？」

そんな都合のいいことがあるなら挑戦はしてみたい。

アスカはやっぱり一口でケーキを食べてしまい、コーヒーを飲んでいる。

他の人間、とりわけ細かく食べる私は、まだ四分の一くらいしか食べていないのに、だ。

ハカセはそんなアスカを観察し、コーヒーをちびちび飲みながら言った。

「科学、それ自体が科学を拒んでいるから、大多数は私の地点を見ることができないのさ」

「常識、なんてものに囚われてるから、それに到達できないってことさ、ナキリ」

アスカの通訳があっても理解が深まるなんてことはない。

「つまり、常識はずれな発想が大事ってことですか？」

「まあそういうことかな。そこが一番難しく、同時に重要な要素な

んだ」

マスターがそそくさと厨房に逃げていった。

「常識はずれ、という発想が既に常識に囚われていることを君は理解しているか？」

確かに、常識があるという気持ちがあるから、常識はずれ、なんて考えるのか。

「なんとなくわかりましたけど、どんな関係があるんですか？」

「君には確かにケーキが見えたとする。触れるし、食べられる、しかも美味しい、いいかね？」

「はい」

「でも、もし、そのケーキは他人に全く見えない、触れることもできないとしたら？」

「その人は私をからかってるんだと思います」

ハカセはため息をついて「これはダメだ」とアスカに呟いて厨房のほうへ歩いていった。

「ナキリは誰かの視点で世界を見たことはあるかい？」

「もちろんないですけど」

誰の気持ちも分からないし、誰がなにを感じても身じろぎもできないと思う。

私の痛みは他の誰にもわからないし、誰の痛みもわからない。

死ぬほどの痛みがわかってしまったら本当に死んでしまうかもしれない。

「そこだ、そこなんだよ。他人なんて誰にもわからないってことが重要なんだ」

わからないことが重要だなんてますますわからない、という風な顔をするしかなかった。

「君の現実には君のものってことだよナキリ。さっきの君とハカセがまさにそれだ」

「えーと、ハカセが私で私が他の誰か、ですよね？」

「そう、少し分かりかけてきたね。ハカセには見えてるんだけど、

君には見えていなかった」

でもそれだと、他の誰かが腕をぶつけて落としてしまったりするんじゃないだろうか。

「ハカセの視線を追って君はケーキを見たはずだ。そこで初めて気づいたんだよ」

「その通りなんですけど、変ですよ、誰かの袖についてしまったりすると思いますけど」

「全ては認識するもの次第なんだよナキリ。見えなければ永遠に見えないんだ」

最初から見えないから見えないのは当たり前だと思う。

「言い方が悪かったな。見えない、ということは無い、ということなんだけど、違うな」

なんて言えばわかるかな、とアスカがまた困りだした。

うんうん唸って思い出そうと首を傾げていたが、ついに諦めたようだ。

「ハカセが一度だけ教えてくれたんだが、忘れた」

結局ハカセの超能力についてはお預けらしい。

ハカセの食べかけケーキがアスカの胃袋に消えていく。

私もケーキ増やして食べたいのに。

「マスターもアスカさんも、ハカセに教えてもらったってことですか？」

「ん？ なにを？ ああ、ココノエは違うよ」

「私もやってみたいなあ」

好きなだけ食べていられるし、好きなだけ分けてあげられる、素敵な力だと思う。

「アスカさんは教わったんですよね。どうやったんですか？」

「廃人になりたいなら止めないけど、覚悟はあるかい？」

簡単にあんな能力を得られるなんて思ってたけど、廃人になるって、なぜ？

「でも、アスカさんは変じゃないと思います」

アスカはふう、と一息ついて、自嘲気味に言った。

「私が、おかしくない、ねえ。あんなことできるのって変じゃないの？」

「素敵なことだと思いますけど」

私には彼女が人より優れているだけだとは思えなかった。

確かに優れた能力を世にださないのは、おかしいといえるのかもしれないが。

目立ちたくないのは別段珍しいことではない。

「ちなみに私は博士の怪しい薬漬けでこうなったんだよ」

「クスリ？」

それはドラッグといったニュアンスだろうか、一瞬、思考が止まる。

「世間一般とは物が違うけど、多分ナキリの想像で合ってるよ」

「それは、苦しいんですか？」

薬物中毒や依存症は、とても辛く厳しいことだという曖昧なメディア情報しか私は知らない。

「麻薬とか、ドラッグと呼ばれるものとは用途が違うから衝動的な苦しさはないな」

「ハカセも薬物を使ったとしたら相当なチャレンジャーですね」

実験例も成功例もなしに自分自身をモルモットにするなんて、恐ろしい話だ。

「それがね、ハカセは薬なんていらなかったのさ。薬は自らの解析の産物だそうだ」

「アスカ、電話だよ」

会話が中断される。

マスターが厨房からアスカを呼んでいる。

「なんだろ」

アスカにも心当たりがないらしい。カツカツと靴音をたてながら、早足で行ってしまった。

一人残された私は少し残っているケーキを片付けて、コーヒーに

手を伸ばす。

口をつけたのでそのまま飲みきったが、冷めていて苦みが強すぎた。

「じゃ、お願いしますよ、ハ、カ、セ」

少しふざけた調子の声が出て、マスターがこっちに戻ってくる。

「ああ、わかった。そのかわりアスカを連れて行くからな」

ハカセとアスカが連れ立ってどこかへ行ってしまった。

「どうかしたんですか？」

「うん、ちょっとね。それより、コーヒーまだ飲む？」

「ぜひ、ケーキも、もう一つ欲しいですね」

笑い合いながらコーヒーとケーキを用意し、席に着く。

どちらからでもなく、胸の前で軽く指先を合わせ、まずはコーヒーを一口。

「超能力ってどうやって使えますか？」

マスターもなんとなく分かっていたのか、舌先でコーヒーを転がしてから飲み込んだ。

「ハカセが知ってるけど、やっぱり興味あるの？」

「ケーキ増やしたりできたら素敵じゃないですか」

そんなことができるなら、アパテイアの財政にも貢献できるし。

マスターは、あははと笑って私の頭を少し強く撫でた。

「この店はなくならないよ、少なくともそんな問題じゃあね」

「マスター、私の考えてること、分かっています？」

「なんとなくなね。なっちゃんはいつだって遠慮して、そのくせ実利主義じゃない？ だから」

返す言葉がない。自分の葛藤も、くだらない誇りも、全部見透かされていたのだから。

「ん、我ながら上出来」

ショートケーキのイチゴを残してぱくつきながらコーヒーを飲むマスター。

私も目の前のチーズケーキにナイフを入れる。



「マスターは、私とイチゴ、どっちが大事ですか？」

「いまはイチゴかな、でもね、どっちを失うかって訊かれたら、イチゴを選ぶよ」

私は時々分からなくなる。マスターが大事なのか、今の暮らしが大事なのか。

「私からも訊いていいかな」

「どうぞ」

マスターのほう私が私よりも知っているんじゃないか、とも思う私がいる。

「なっちゃんって超能力使えるんじゃないの？」

「使えるならもっとはっきり使ってますよ。ハカセみたいなのだったら尚更です」

「だよねえ、でもなっちゃんしかいないんだよね」

「なんのことです？」

私になにか、特別なことをしただろうか。

「アスカが元に戻ったのもそうだし、タチバナを助けたときだって」

そう、言われてみれば自分でもおかしいことは分かる。

私は端的にはあるが、なにかを理解していた。そして得体の知れない声を聞いてたのだ。

「私は、何か言いましたか？」

「覚えてないの？　なんか、そう、予言じみたこと言ってたんだけど」

「私も誰かの声を聞いたような感じだったんです。私の言葉なのか、自覚がなくて」

そもそも、私は目眩をおこして倒れる最中に声を聞いたと思っていたのだ。

「なんだか目眩がして、ぼんやり聞こえただけだと思ってたんです」  
マスターは左の人差し指を口に添え、何かを考えているようだ。

「イタコとかそんな感じなのかなあ。でもそれだと降りてきた人物を知らないといけない」

「イタコって知らなくても呼べるものなんじゃないですか？」

「それは誤解だよ」

マスターが言うにはイタコは縁者、つまり依頼者の縁を使いその人の存在を知るといふ。

「彼らは縁を手繰り寄せているだけであって、呼んでいるわけじゃないんだよ」

「なるほど、マスターは物知りですね」

マスターはフフ、と笑い、そうでしょ、と戯けてみせる。

「でも、もし私がなにか起こしたとしたら、どんな現象なんでしょうね」

「こればかりは回数を重ねて経験から判別するしかないからねえ」

「そうですか、もしかしたらハカセはそれで入門者か？　って訊いてきたんですかね」

「ハカセがそう言ったのか、ならほぼ間違いないな」

「どうしてですか？」

「ハカセは私の能力に気づいた最初の人だったからさ、今のなっちゃんみたいだね」

マスターもなんだかんだハカセを認めているんだと感心してしまつた。

「ハカセってすごい人なんですネ。そういえば二人はどこに行ったんですか？」

マスターが何か頼んで、ハカセがアスカを連れて出て行った、というのわかる。

「タチバナを迎えに行ったんだよ、黒コートが病院から消えたらしいからね」

「もう回復したとしたら。尋常じゃないですね」

「でもハカセが埋めたとしたら不思議でもないな。あとは約束を守るかどうか、だ」

「うめた？　いったい何のことです？」

「傷口にあったはずの細胞を埋めたってことだよ。ハカセはそうい

うこともたまにやる」

傷口を埋める、か。人の細胞まで作り出すことができるのか、ほんとに万能だな。

「そんなこともできるんですね。ところで、あの黒コート、約束を守りますか？」

「守ってもらわないと風通し良いままだからね。とっつかまえないと」

「ははっ、確かにその通りですね」

あの男はドアを直すなんて一言も口にはしていないが、言わぬが華というやつだろう。

私の考えていた約束は、もう、殺しはやらない、のほうだったのだが。

「黒コートはまだタチバナを狙うと思いますか？」

マスターはイチゴを口に放り込み、舌先で暫く弄んで口を開いた。

「まあ、まず確実に、諦めてはいないだろうね。」

「それはなんとなく、ですか？」

「いや、確信。なっちゃんも分かるでしょ、あの感じ」

疑念の欠片も湧かない。何故か頭の中が透き通り、起こる全てを受け止められる。

「同じものかどうかはわかりませんが、わかると思います」

「ま、理由は本人捕まえてみないとわかんないけどね」

あの二人が無事にタチバナを連れてきてくれると良いんだけど。

厨房から微かに、しかし二人には聞き取れる電話の音が会話を中断した。

閑静な住宅街、山の麓をやや削り整地した、といった趣、人の姿は見えない。

ココノエから教えられた住所に辿り着いた私とハカセ。

「なかなかの大家のようだが、ここであっているのかね？」

ハカセの疑問も尤もだ、武家屋敷の風情、石垣と白壁が歴史を感じさせる。

丁度区画の最奥に位置する場所、尋ね人は例外なく視認できるであろう。

この屋敷の主人は戦でもするつもりだったのかとも思えてくる。

「住所はここですね。私の知る男には似つかわしくありませんが」

私が見たタチバナという男の印象は不健全で陰気な、ぼろアパートの住人だった。

住所はここで間違いない、表札は掠れて消えかかっている。

「違ったらそれまででしょう」

外観と不釣り合いなインターフォンを鳴らす。二十数秒ほどして、返事があった。

「はい、どちら様でしょうか」

機械を通して多少の変質はあるものの、それはタチバナの声だと認識できた。

相変わらず抑揚がなく、厭世的な印象を与える低い声。

「ココノエの使いの者だ。黒コートが病院から消えた。死にたくなければ出てこい」

「アスカ、それではまるで我々が殺すと脅しているようだぞ？」

確かに、しかし他に言いようがあったろうか。済んだことだ、しようがない。

「ああ、アスカさんですね、すぐいきます」

タチバナはなるほど、二分も経たずに出てきた。格好には少々違和感を覚えたが。

ハカセは怪訝な顔でタチバナを眺めている。

「捜し物はこれではない、これでもある、うむ、これもまた理論の実践か」

ハカセの頭の中は私にとって明日の今頃くらい、予想が出来ない構造になっているはずだ。

黒コートとの関連性やその本質についての洞察というのは理解で

きる。

しかし、結論に至るまでの過程の一切が予想すらできないからだ。

「見れば見るほどあの男だな」

素直な私の感想。違う点、丈の短いフレンチベージュのダッフルコートを除いて。

「そうですね、本当に私もそう思います」

毎日、鏡の前に立つ自分、鏡の中から発砲してくるなんて悪い夢だ。

質の悪い白昼夢だと思い込んでも無理はないだろうに。

「それで、わざわざ来てくれたんですか？　ありがとうございます」

「うちの店長のお達しでね。礼ならそっちに頼む」

「わかりました。お二人にも、ありがとうございます」

ココノエにも、か。人付き合いは下手ではないだろうに、知り合いは少ないだろうと感じた。

ふと、タチバナはどんな人間なのか、なんとなく判るような気がした。

今の服装はダッフルが誤魔化しているが、端々から見える黒が、ナキリそっくりなのだ。

服装が作り出す空気は人によって微妙に異なるが、明らかに二人は同質だと言い切れる。

「それで、あの男が消えた、というのはどういうことですか？」

私は病院からの連絡と、黒コートがほぼ健在であることを簡単に説明した。

ハカセの力や私の力の話は流石に理解できないだろう。適当に繋いでおく。

「つまらんことはいいだろう、この辺りも騒がしくなってきたようだ」

「どういうことです？」

ハカセは騒がしいと言う、しかし、辺りにはカラスの鳴き声すら聞こえない。

「なるほど、修復が容易だと思ったらこういうことか、これを見ないのは難しい」

返答の代わりに呟きが帰ってきた。ハカセは左手で右目を隠すように俯いた。

タチバナにはなにがなんだか解らなかつただろう。解る必要もないが。

「彼はあちらの住人だということですか？」

私なりに材料から推察した解答はこれだ。

「今日は冴えてるな、繋ぎ目、と表現するほうが、より正確だろう」  
ハカセは俯いたまま続ける。タチバナは不思議がるようなこともなく大人しくしている。

「アスカ、君が黒コートとやりあったとき、周囲に人は居たか？」  
瞼を落とす一瞬の追憶、あの場の臭いや風の流れ、誇張される以前を思い出す。

「私達以外は誰も、それがなにか？」

「手に負えんな、戦場にいるよりも質が悪いぞ」

相変わらず解らないタチバナと、ここにきて解らなくなった私、様はない。

「準備しておけ、これは完全な失態だ。私は戦力にならんどころか足手まといだ」

ハカセは革製の眼帯を右目につけ、視界を制限する。

ハカセが「失態」などという言葉を使う場合、それは原発事故級の重要案件である。

彼女は人死にがなければ町が一つ無くなっても「有意義だった」で済ませるだろう。

それほどのことなのだ。

「逃げますか？ 戦いますか？」

判断を仰ぐ、この点においてハカセは足手まといではない。

「逃げたところで守るものが増えるだけだ」

私は黙って頷く、誇張された私の身体機能が周囲の全てを把握す

る。

肌を撫でる。

鼻腔に触れる。

微細にして多彩な音。

体表から感じ取れる場の空気。

それは狩人の、捕食者のそれに類似した衝動的な高揚感。

襲撃を待つ獲物の立場であつたとしても、打ち倒し、生き延びることへの渴望。

私はしばしばそれを押さえる為に演武の真似事に没頭する。

自分を殺すかもしれない相手を探す。

固定された天秤が支点を失うような、狂った鼓動の加速。

「いた」

誰も居ない。誰も居ない住宅地に。

七区画ほど先を右に曲がった地点に確かにいる。

あの黒コートであるかは判らない。この人の居ない住宅地に、それは居るのだ。

それだけで十分だ。

否、それ以外は必要ない。

この場に必要なのは在るということ。

明らかな違和感のなかに在るものはそれだけで排除する理由がある。

「しばらく、待っていてください」

駆ける。滑るように。水の中を飛ぶシャチを、私自身が想起する。音があつてはならない。

流れに逆らつてはならない。

そしてなにより、美しくなければならない。

派手な跳躍などもつてのほかである。

空気の流れは経験が還元してくれる。

それはまだ警戒する動作を感じさせない。

あと、二つ。ここまで一呼吸。

意識の密度が上がる。

相手の行動から自分の対応まで、日常のほぼ全てを排した暴力の理論。

進行速度、対応速度、推測。

あと一つ。

ふと、懐かしい匂いを感じる。

否、ここに居るはずがない。疑念は無意識に歩みを遅らせる。

相手の反応と同時に後ろへ回る。

ゲームセット。

「なんでこんなところにいるんだ？」

沈黙が流れる。黒塗りの女は答えない。

「わかった。先に謝ろう。驚かせて悪かった」

黒塗りの女は答える。

「マスターから伝言がありました、それで」

黒コートが死体で見つかったこと、他にも特筆すべき点に関連してあること。

「なるほど、それでは護衛は必要なかったな」

「いえ、タチバナも一緒に連れてくるように言っていました」

タチバナが殺される可能性は死んだというのに、ココノエは何を考えているのか。

ナキリを使いに出さなくてもその通りになっただろうに。

「それについてはなにか聞いた？」

首を横に振るナキリ。纏めて話したほうがいいということか。

「わかった。私は二人を連れて帰るから、ナキリは先に戻っていてくれ」

ナキリを少しだけ誇張する。本人もそれを察したようだ。

「分かりました。気をつけてくださいね」

来た道を駆け出す彼女は風、花を撫でるような微風を思わせた。流れてきた匂いは、やはりあのコーヒーの匂いだった。



「ふう、で？ 人払いが済むまで隠れていた理由は何？」

なっちゃんを使いに出して、入れ替わりに入ってきた男に注意を向ける。

深く被ったキャスケット、物騒な空気を纏うようなアルスターコート。

薄暗くなった店内からは、顔や服の色は読み取れなかったが、金属質な印象があった。

「いえ、ドアがない喫茶店とは斬新だ、と思ひましてね」

冗談とも皮肉ともとれる台詞に神経が尖る。

「失礼。理由は特にありません。強いて言うなら私が話しやすいかどうかです」

無礼ながら丁寧な落ち着き払った返答。鼻につく。

「本題はなんだ？」

逆光は不利だが、暴力を求めているわけではないようだ。

その眼があるであろう位置を睨み、相手の出方を見る。

「招待状をお持ちしました」

男は茶色がかった、いかにも招待状らしい封筒をカウンターに置き、出て行った。

敷居を跨ぎながら一言。

「明日の夜、お待ちしております」

慌てて後を追ったが、そこには人の群れしかなかった。

夕方、家路を急ぐ人々に確かに活気づいた通りには、いつも通りの平穏があった。

昼間の凶行が嘘であるように、否、不自然なほどの人が溢れている。

あまりにも不自然だ。まるで店の前に突然現れて、それぞれが離れていくような。

「なんだ……これは……」

呆然とする。

見たこともない夕方、部分的に見たことは、確かにあるのだが、全体としてはない。

混ざり合った夕方。

昨日見た泣いている子供。

いつも笑顔の子供。

早足に過ぎていった女。

ゆっくりと手を繋いで歩く女。

歩き煙草をしていた男。

灰皿の側で煙草を吸う男。

それは昨日だったのか今日だったのか、或いは違う、朧気な、いままでなのか。

ああそうか、これは私のいままで、だ。

移り変わっていく景色はどんどん昔になっていく、私自身どれほど前なのか判らないほどに。

体が動かない。硬直ではなく異常な弛緩。気怠いなどといった生やさしい脱力ではない。

目眩を起こして倒れているのに意識がしっかりしているような状態。

小さい頃に退屈な集会で起こした目眩が思い出される。あれ以来なかったのだが。

鮮明な意識、混濁した感覚、目の前に現れる少女の姿、それは今も思い出せる光景。

少女は泣いていた。顔も隠さず、表情はなかったが、少し俯いて、確かに涙を流していた。

当時の私はこの店を始めたばかりで、正直、寂しかったのだと思う。

アスカと離れて、ろくな話し相手もないのは辛いことだと思い知らされた。

しかし、少女とは一言も会話はなかった。ゆっくりと手をとって招き入れる。

温かい、よりも少しだけ熱い紅茶と、チーズケーキを出してあげた。

自分でも不思議だった。初対面の相手にこんなにも優しい気持ちになったのは。

少女はまだ泣いていて、それらには手をつけようとしなかった。私はコーヒーを飲みながら少女を見ていたが、少女のほうも私を見ているだけだ。

「おねがい、冷めるから、温かいうちに。ああ、できれば紅茶からね」

少女は音も立てず紅茶を飲む。カップがテーブルに触れる音すら。ほのかに柔らかな表情が見えた。流れる涙は少し増えたようだった。

私にはなにが悲しいのかわからなかったし興味もなかった。

ただ、確かに、少女が悲しいのだということは実感できた。

私はただ見ていた。少女の動作を。

緩慢なくせに繊細で、震えることもなく、とても優しく動く。

仏頂面で泣いている、他の人間は変な奴と思うだろう。

でも、私はそうは思わない。

悲しいと誰かに伝えることは、その悲しみを嘘にするから、少女は無表情なのだ。きっと。

涙は堪えることが出来ない。それでも、誰かに伝えてしまったらそれは違うのだ。

悲しい、ではなく、私を見て、私の悲しみを見て、私を助けて、自己愛の悲鳴でしかない。

少女を見ていて、少なくとも私はそう感じた。

沈黙が辺りを満たしていく。いつのまにか土砂降りだ。

雑多だった記憶はここに収束した。人の群れはなく、あの日そのものだ。

身元不明の少女に名前を尋ね、少女は答える。

辻堂、辻堂奈霧。

少女に関して、他のことは一切訊かなかった。

ただ、なんとなく訊かなかった。理由はない。なんとなく、ここで働きなさいと言った。

辻堂菜奈霧は静かに頷いて、よろしく、お願いします、と消え入るような声で答えた。

その後、辻堂奈霧が大泣きしたことを今でも鮮明に思い出せる。相変わらず何が悲しいのかは分からなかったが、日が変わるまで泣き続けたのだ。

幼子をあやすように抱いて次の日を迎える頃、泣き疲れてやっと眠った。

なぜこんなことを思い出しているのか不思議でならない。

そんなことを思う間に、視界が暗緑色に染まっていく。

私の意識はとくに失われていたようだ。

記憶やらの雑多な世界にふわふわと浮いていたが、ついに沈むのだと実感した。

第三者的な視点が体と意識を観察して、そのどちらもぷつぷつと途絶えてしまった。

動きはいつもの私、だけど気持ちいい疾走感がある。

踏み出す一歩一歩がいろんなものを蹴散らすような感触、別の生き物になったみたいだ。

アスカはなんで生活に役立てないんだろう、不思議だ。

あつという間に店の前、紳士風の男が出て行くのが見えた。

流石にあの状況では入店を断るしかないだろう。内装はある程度片付いてるけど。

店に入る。相変わらず中は薄暗い。マスターがテーブルに突っ伏している。

「はあ、こんなところで寝たら風邪ひきますよ」  
返事がない。

さっきの来客はこれを見て帰っちゃったんだろうな。

「もう、お客さん来てたのに寝てちゃ駄目じゃないですか」  
軽く揺さぶってみる。

「熟睡してる、のかな。あんなことあったし、疲れてもしようがないか」

起きたら、お腹すかしてるよね。今のうちに作っちゃお。

今日の晩ご飯はなんにしようとききから考えていた。

冷蔵庫に丁度あるし、あったかいし、五人もいるし、うん、決定。  
すね肉はないけど牛のブロックがあるし、なんとかなるだろう。

牛肉は五十グラムくらいに、野菜は大きすぎない程度にぶつ切りに。トマトはそのまま。

圧力鍋に牛肉を放り込み、ちよっぴりのニンニクと油で炒めて香りをつける。

強火にしてアルコールを飛ばす、ちよっと強い香りだけど食欲をそそる

赤ワインとトマトの水煮、ブイヨンとローリエを入れて混ぜ混ぜ  
つと。

「ん、いい香り」

ハカセ達遅いな、てつきりすぐ帰ってくると思ったのに。寄り道  
でもしてるんだろうか。

火から下ろして密封つと。レバーを確認したら中火でコトコト。

「ナキリ、戻ってる？」

噂をすればなんとやら、とはよく言ったもんだ。

「おかえりなさい、遅かったじゃないですか」

入り口から聞こえてきたアスカの声に返事をする。

アスカはマスターが寝ているのを見たのだろう、厨房まで静かに  
歩いてきた。

「ハカセ達はどうしたんです？」

「先に上がってもらってるよ。それより、ココノエ寝てた？」

彼女がヒソヒソ話すのはなんだか違和感がある。

でも、なんだか友達になれたみたいで少し嬉しかった。

「みたいです。マスターも疲れてたんですね」

「そっか、ココノエがあんなに無防備なのは初めて見たよ」

「どういうことだろう。私なんかより、よっぽど長い時間を一緒にいたんじゃないのかな。」

「私もあんまり見ないですけど、たまにマスターの部屋で遊んでるとあんな感じです」

「そう、たわいない会話やチェスの合間にあんな感じでベッドに沈んでるんだ、いつも。」

「羨ましいな。私の横では見せてくれなかったのに」

「なんだか寂しそうな顔がいたたまれない。」

「アスカさんのせいじゃないと思います。だって昔は危ないことばっかりだったんでしょ？」

危険と隣り合わせだったなら、仕方ないと思う。

「ちよっと近寄りがたいけど、それはアスカが美人だからだろうし。マスターと笑いあってるのを見ると、友達になってみたいな、と思わせる笑顔もわかる。」

アスカはまだ納得できないといった困った顔をしている。

「じゃあ、私とも友達になって貰えませんか？」

照れたように頭をかき始めるアスカ、こんなところも可愛いな。

「こ、こちら」

シュー！ 鍋から噴き出す蒸気が返事を遮ってしまった。

アスカがクスクスと笑い始めた。私もつられて笑ってしまった。

「……うん、弱火で十五分は煮なきゃいけないですから、あっちで話しますか」

「ああ、そうしよう」

アスカが右手を差し出してきて、私はきよんとした。

すぐに握手を求めているのだと気付いて、慌てて手を握りかえした。

「ナキリ、慌てなくてもいいよ。あと、アスカでいい」

私の様子を見てアスカはクスリと笑った。悔しいけど、なんとなく、格好良かった。

コーヒーマットをもって席に着く二人。マスターを挟んで向かい合う。

「さっきの返事は……」

アスカが右手で制して笑った。

「友達にこんな話はもう必要ないさ」

「うん、そうですね。じゃあ好きなケーキはなんですか？」

アスカは左手で頬杖をつき、右手でマスターの髪を弄りながら答えた。

「甘いケーキ、かな。それよりナキリ、堅苦しいのはナシにならない？」

堅苦しい？

「至って普通ですけど？」

右手で頭をかきながらアスカが唸る。

「まあいいや、ナキリにとっては十分自然ってことなんだろう」

一応納得したらしい。なんのことやら。

「それより、甘いケーキ、なんていっても、ケーキなんてほとんど甘いじゃないですか」

「それはそうだけど、時々にかーいのあるだろう？」

「あるにはありますが、たとえばイチゴのショートケーキ、とか、モンブラン、とか」

今度は腕組みをして首をひねって考え始めた。真剣さが伝わってくるあたりが悲しい。

「なるほど、アスカさんは甘ければなんでもいいんですね」  
「ちょっと寂しいな、ケーキにも個性があるんだし。」

「ナキリ、甘ければなんでもいい、じゃないよ。誤解しないで」

アスカは右手を額に当て、少しして口を開いた。

「そう、どれもおいしいんだから、全部一番ってことだよ。苦いの以外で」

なるほど、順番つけるなんて確かに意味はないかもしれない。  
静かに頷く。

「わかってもらえたようで大変結構。それにしてもココノエ起きないな」

アスカはそういつてマスターの頭をぐしゃぐしゃにかきまぜる。  
それにしても、マスターの髪サラサラだなあ、もう夕方だっていうのに。

「う……ん……？」

マスターがやっと目を覚ます。二人ともなんでここにいるんだ、といった表情で。

「夢、いや、……招待状。そう、カウンター。……あった」

急に立ち上がってカウンターのところに何時の間にか置いてあった封筒を手取る。

「どうしたんですか？ そんな封筒ありましたっけ？」

「……なっちゃん、変な男見なかった？」

マスターが封筒を開きながら聞いてきた。

「なんか紳士風な人が出て行くのを見ましたけど」

アスカと私は目をあわせ首を傾げた。

「あの男は私を気絶させた」

「ココノエを気絶させられるなんて、蟻の群れくらいだろうに」

アスカが冗談か本気かわからないことを言う。

マスターからアスカに向けられた視線は、それがわりと本気だっ  
てことを教えてくれた。

「なにをされたのかもわからない。が、これを断るわけにはいかな  
な」

マスターは読み終わった手紙をテーブルに叩きつけた。

「不愉快だが、全員で誘いに乗るしかない」

眉間にしわを寄せて、こんなマスターを見るのは何年ぶりだろう  
か。

「儀式に全員で来ること、だと。タチバナやハカセも含めた全員で」



急にこんな手紙を見せられたのも驚いた。

でも、近くにそんな場所があることの方が驚きだった。

生活に則した行動範囲なんて案外その程度なのかもしれない。

「そんな場所があったんですね。でも行かなくてもいいんじゃないですか？」

マスターが不快なのだから突っぱねてしまえばいいんだ。

どうせろくな要件ではないのだから。

「行かないと強制的に連れて行かれるからね、たぶん」

アスカがぼやく。

「儀式がらみでしょ、ココノエを押さえられる奴だし、余裕で連れてかれるよ」

やれやれ、と肩を竦めるアスカ。

「そう、ならこちらがペースを握る可能性が欲しい、相手はこっちを舐めきっている」

マスターは悔しそうに言ったが、どこか面白そうに口の端を上げた。

アスカが右眼を閉じる、ウインクとはちょっと違う、考えるような仕草。

「ココノエはどうやって気絶させられたんだろうね」

相変わらず右眼は閉じたまま、少し俯いて呟いた。

「推測だけど、記憶をぶつけられた。たぶん」

二人の会話はよく分からない話になってきた。超能力なんて理解できない話だ。

下手に口を出しても始まらないし、終わることもない。いちいち邪魔になるだけだ。

目線を泳がせていると、もう十五分経っていることに気がついた。レシピは曖昧だけど、ずれすぎるのは宜しくない。

「お鍋が呼んでるんで、ちょっと行ってきます」

二人は一瞬だけ柔らかい顔で頷いてくれた。すぐに難しい議論を再開したけれど。

火を止め蒸す。

いつからこんなにも騒がしい日常になったのだろう。

ほんの数日で、昨日を思い出す余裕もないほど騒がしい。全てがうんざりってわけじゃない。

アスカも、ハカセだって、タチバナも、不思議な人達だけど。

少しでも知り合いが増えた。私を少し知っていて、私も少し知っている。

歩道ですれ違い様に肩をぶつける他人よりも、ほんの少しだけ。

お鍋は相変わらず温かい。触れない程度に手をかざし、暖をとる。ストーブとかよりも優しい温かさ。じんわりくる。

背中の芯が震えた。

そこだけがとても冷たく感じる。

二人の会話は聞き取れないくらい小さく、でも確かに話していると判る程度に響く。

ささやく歌のようなそれを背景に、私は時計を眺め続けた。

「それで、なにか策は？」

ハカセがポトフのお肉をすくいながら促す。

マスターの部屋の大きなテーブルを囲んでいる。

団欒と呼ぶには違和感のある取り合わせ、タチバナは父親といった空気ではないし。

「なにも、ん、おいしいね」

策も何もない、男らしいというか、マスターらしい。

いままでもなんとかあったから、なんとかなるだろう、くらいに思っているんだろう。

「お口にあってよかったですよ」

お褒めの言葉は滅多にいただけない。味には結構厳しい人だからだ。

かくいう私も、マスターの料理にあれやこれや言ってしまうのだ。

けれど。

アスカがものすごい勢いで料理を消している。もう、三分の一程度まで減っていた。

「確かにおいしい。……ハカセの心配もわかりますけど、今は食べましょう」

これはハカセもちよつと怒るんじゃないのかな。

「ふむ、それもそうだな、ココノエが美味しいというなら確かなのだろう」

意外に暢気だった。

「確かにおいしい、でも、僕はここにいて良いのでしょうか」

不安げに、しかし決して萎縮することはなく、タチバナが口を開く。

「いいんじゃないの、この料理がおいしいと思えるなら」

答えたのはマスターだった。私も同じ意見だ。

「それに、巻き込まれてるのは君の方だからね」  
アスカが補足する。

「私は君に巻き込まれたんだがね」

ハカセがアスカに皮肉を飛ばす。

そんなやりとりに、全員が表情を緩め、笑った。

「うん、では改めて自己紹介でもしとこうかな！」

マスターが急に立ち上がって叫んだ。

「私はこの店のマスター、九重椋、よろしく、次なっちゃんね」  
主にタチバナに向けられたそれは次に私を襲った。

「辻堂奈霧、よろしく」

誰とは言わなかったが、アスカが口を開いた。

「アスカ・シニフェ。アスカでいい」

ハカセがやれやれ、といった感じで続ける。

「コートランド・アポクリフ、ハカセと呼べ」

最後にタチバナの番となった。

「タチバナリンドウ、タチバナと呼んでください」

「リンドウ？ 珍しい名前だな、どんな字で書くんのだ？」

マスターが食いついた。確かに珍しい名前だ。

「リュウのキモと書いてリンドウですね」

竜の心臓、か、そう聞くとなんとも男らしい名前に思える。

響きはとても女性的で美しいのだけれど。

「花の名前です。今では珍しいですが、農地の側に良く咲いたそうです」

「食えるの？」

冗談交じりな口調でアスカが言った。

「根は薬になるそうです。ただ、とても苦いことも名前の由来らしいですが」

「はは、それじゃあ煮ても焼いても食えないな」

アスカは笑っていた。

でもそれは蔑む笑いのような下品なモノではなく、茶化すような。

親しい感じがした。

「よく言われます」

タチバナも優しく笑った。

こんなにも賑やかな食卓は初めてだ。私にはここに来る前の記憶がないし。

いつもマスターと二人きりの食卓だった。楽しかったけど、賑やかではなかったな。

ここしばらく騒がしかったけど、食卓は賑やかで楽しい。

いろいろな調味料で味を少し変えて各々が楽しんでる。

手渡されたり、手渡したり、行儀はよくないんだろうけど。

「ナキリさんがここで働き始めた理由ってなんですか？」

食べることに集中して会話から遠ざかっていると、不意にタチバナがそんなことを口にした。

「あたしがその才能を発掘したからよ、うちの看板娘なんだから」  
マスターがガツポーズをとりながらそう言った。

「いやあ、あたしとしてもフアインプレーだったねあれは」

マスターは憶えているんだろう。泣いていた私を。  
私の最初の記憶、思い出。

泣きながら歩いて、この店の前で抱きとめられた。  
夕暮れ時が心細かったわけじゃない。自分が一人でも悲しくはな  
かった。

心細くもない、独りでもいいと思う自分が悲しかった。  
泣いて泣いて、抱きとめてくれた人の服を汚した。

日が変わる頃まで、抱いてくれていたのを憶えている。

「そう、マスターったら熱烈なんですから、困ったものですよ」  
私の言葉に、マスターは優しい微笑みを返してくれた。

「へえ、こんなにも地味なのにねえ、私はスカウトしてくれなかつ  
たくせに」

アスカはそんなことを言ったが、顔は綻んでいる。

「私も変わったんだよ、アスカもそうでしょう？」

違う、と二人は笑った。

思えばここにいる人間は、皆、独りだったんじゃないだろうか。  
誰もが不意に手に入った団欒に喜んでいるようだ。

私とマスターは独りではなかったけど、独りではなかっただけな  
のだ。

毎日、少しずつすり減らし、繰り返して、冷たくはないそれをす  
すっていただけだ。

私はそれでも良かったのだ。

おいしいコーヒーを飲んで、おいしいケーキを食べて。

下らないことを話して、下らないことでケンカして。

昨日なにをしたのか全部知ってる。

マスターの側にいるだけで幸せだと思った。

でも、マスターは幸せではないんだろうな、とも思った。

こんな私だけでは、幸せにはできないんだろうと。

わけのわからない騒ぎのおかげで、よく似た人間が集まった。  
少しずつ、温かさを持ち寄るように。

出会いは偶然、こんな普通じゃない偶然も、意外にいいものだ。騒がしいのが解決したら、いいのに。

それとも、騒がしくなくなったなら、誰もいなくなってしまうのだろうか。

「なっちゃん、どうしたの？」

マスターの声で我に返る。

「いえ、この騒ぎが終わっても、一緒にいられば、と思っていました」

身勝手だ。この騒ぎでいろんな、死体とか、普段見ない嫌なモノを見てうんざりしたはずだ。

でも、普段では会えない人に、会うことが出来た。

「ナキリは私と友達になってくれるんじゃないの？」

アスカがからかうような口調で言う。なんだか嬉しかった。

「観光が残ってるんだ」

ハカセは、興味ないんだが、と、優しい口調で付け足した。

タチバナはきつといつものように店にきてくれるのだろう。穏やかに笑っている。

「そういえば、タチバナはあの家に独りなのか？ あんなにでかい屋敷なのに」

アスカが思い出したのだろう疑問を呟いた。

呟きながらも手は止まらない。四杯目のおかわりが、もう、半分ない。

あれだけ食べてあのプロポーションは世界規模で敵を作るんじゃないだろうか。

「独りです。両親は交通事故で死にました。兄弟もいませんし」

口調も表情も変えず、挨拶でもするかのようにタチバナは答えた。私には想像することしかできないが、悲しいとか、寂しいとか、思っただろうか。

「ああ、変に考えないでください。思い出したくないようなことでもないですから」

タチバナはほんの少しだけ目を伏せて、言った。

「どんな死に方でも、その人の最後を認めないのは失礼だと思いますし」

私は彼の両親のことに、少しだけ興味があった。

とても私に似ている彼を知れば、私のこともわかるかもしれないと思ったからだ。

「大きくなってからのことなので、悲しくもなかったんです。薄情なのかもしれませんけど」

タチバナはあははと笑っていたが、どこか寂しそうだった。

悲しくなかったことが、悲しかったのかな。

「まあ私も親なんて顔も見たことないからな、なあココノエ」

「そうだね、孤児院育ちだったし」

「初耳ですよ、マスターもそうだったんですか」

お互い昔に触れるような話はしなかったし、聞かれても答えようがなかった。

私には記憶がない。マスターも聞いてこないから記憶がないことも知らないだろう。

マスターの昔話には興味があったけど、自分の昔話がないのが怖くて聞けなかった。

「あ、でもハカセはまだ生きてますよね」

アスカが不謹慎なことを口にする。

「まだ、な。夫婦そろって世界何周できるか旅行とか言って音信不通だが」

ハカセも本心か冗談なのか、こんなことを言って笑っている。

「はっあの人達らしいね、そのうち寄ってくれないかな」

どうやらマスターは面識があるようだ。

「どんな人なんですか？」

「ん、いたって普通の富豪さんって感じだね。お仕事は秘密っていう不思議な夫婦さ」

富豪で仕事が秘密、というアメリカンでブラックな人物像しか

でてこないんですが。

「なっちゃんもわかりやすいね、優しい人たちだよ、二人ともね」

「まあ、あいつらが裏でどんなことをしているかなんて私にもわからんがな」

ハカセがフォローを台無しにする。実の娘なのに。

「賑やかでいいですね」

一人静かに聞いていたタチバナが口を開く、どうも落ち着かないようだ。

「先にシャワー浴びるかい？」

「ええ、ありがとうございます」

「じゃ、案内しよう」

マスターがタチバナをシャワールームに連れて行った。

タチバナはなんだか緊張しているように見えた。

「おかわり」

「もうありません」

「なんだと」

文句はハカセだった。どこかの大食らいが一人で食べ過ぎなのだ。

「アスカが食べ過ぎちゃってもうないんです」

ハカセは私という勝負ができる食事スピードだったので、いま一杯目が終わったのだ。

「はは、すいませんねハカセ。食べるの遅いからですよ」

「まったく反省しておらんな」

「ハカセ、増やしたらいいんじゃないですか？」

ハカセは眉間にしわを寄せて、とても不機嫌そうだ。

「ないのだよ、あったらとっくにやっている」

「珍しいですね、ここにあって他にないなんて」

アスカが驚いた顔で言う。例の、在るけど無い、がやっぱり、無い、だったのだろう。

「この店の良いところであり、不便なところだな。ココノエの店だから仕方ないが」



どうやらこの店では、無いものはやっぱり無い、場合が多いらしい。

「アパティアは特別なんですか？」

確かに私自身、ココノエ的神秘などと呼んでいるし、ある種、特別な構造ではあるのだが。

「ああ、なにが、と断言は出来ないが、そこらの教会なんかよりよっぽど澄んでいる」

「すんでる？」

「濁りがないということだ、ここはうまい具合に収束している」  
さっぱりわかりません。

「よく片付いた部屋だって思えばいいんだよ。埃を探してもない、そんな場所」

「なるほど」

例えとしてはすぐわかりやすかった。

埃って何処にあるかわからないけど見つけちゃうと結構あるんだよね。

「まあいい、次はもう少し多めに作ってくれ」

ハカセが残念そうに席を立てて寝室へ行った。

「ハカセもう寝ちゃうんですかね」

アスカに問いかけてみる。お皿はすっかり空っぽで、紅茶を飲んでいるところだ。

「寝るんじゃないかな、ハカセは良い子ちゃんだから」

「はあ、そうなんですか」

子供でも八時には寝ないと思うけど。

「あら、ハカセはもう寝る時間だったか」

シャワールームからマスターが戻ってくる。いろいろ説明していたんだろう。

「まあいっか、なっちゃん、今日は一緒に入らない？」

「いいですよ、アスカもですよね」

各室に設けられているシャワールームは大きい。三人は入れる浴

槽がそれぞれにあるのだ。

マスター曰く、これくらいは必要、なのだそうだ。

知り合いと背中を流し合う為に、と、昔聞いたことがある。

実際に、互いの部屋に泊まりあったりしたこともある。

冬の寒い日は一緒のベッドで寝たりもした。おしゃべりして夜更かしすることになったけど。

「いいよ、私は」

アスカが遠慮するなんて珍しい。こういうのには張り切って参加しそうな感じなのに。

「どうしたんですか、らしくないですよ」

いつもの男っぽさはどこへやらだ。

「はは、アスカもやっぱり女の子だねえ」

マスターが嬉しそうに笑っている。からかうと面白いと思っただろう。

「なっちゃんはそんなこと気にしないと思うよ。たぶん」

なんのことだろう。見られたくない理由があるのだろうか。

普通、裸なんて見られたくないものではあるけど。それとは別の。

「お風呂嫌いなんですか？」

私の言葉に二人そろって吹き出した。真剣に考えてあげたのに。

「ああ、確かに気にしそうにないな、わかったよ」

二人そろってお腹を抱えている。そんなにおかしいこと言ったかな。

「一人でゆっくり入りたい派ですか？」

相変わらず二人は笑ってる。私にはどこがそんなに笑えるのかさっぱりわからなかった。

「ハハハ、ナキリは平和なんだったな、忘れてた」

「なっちゃんは幸せなんだよ、いいでしょ」

なんだか馬鹿にされたような気がする。

その後もいろいろ聞いてみたが、結局笑われた理由は分からなかった。

会話と紅茶を交互に飲み込む緩やかな時間が過ぎ、タチバナが戻ってきた。

「すいませんね、先に使わせてもらって、あ、湯船は使っていませんから」

見た目通り遠慮して、時間的にも頭くらいしか洗っていないな。「こっちこそ悪かったね、気を遣わせて。女三人だと長くなりそうだからね」

マスターの返事に、なるほど、とタチバナは頷いた。

「しかし、いいお風呂ですね。丁度良い広さだ」

「まあね。普段は一人だけど、三人くらいは一緒にゆったりしたいって思ったから」

自慢げに、嬉しそうに、笑いながらマスターは答えた。

「紅茶やは来客用のパックがあるから探して好きにして、それじやいこうか」

マスターはタチバナに適当な説明をした後、私達の手を握って引っ張った。

脱衣所で服を脱いで、驚いた、というか、少し後悔した。

マスターが美人であることは知っていたけど。アスカもまた、方向の違う美人だった。

スレンダーでメリハリがあって、きめ細かい肌がマスター。

いかにも外の人らしく、肉付きがよく、透き通るような白い肌の美人がアスカ。

二人と並ぶと、いかにも平凡な自分が残されているような、劣等感がある。

こういうものは、やっぱり天性のものだ、と痛感する。

浴室に揃って入り、背中を流しあう。

アスカが背を向けるのを最後まで嫌がったが、その理由は一目瞭然だった。

大きな傷が、白い肌を赤く、まるで薔薇のように裂いていた。不覚にも私は、それを美しく、感じてしまった。

「きれい」

「え？」

アスカは戸惑う、まるで告白を受けた少女のように。俯いて、赤くなった。

「きれい、だって、よかったね。アスカ」

マスターは自分のことのように微笑んでいた。

「気に障ったらすいません。薔薇みたいで、ほんとに」

アスカの体は少し熱めのお湯のせいか、全身が赤みを帯びていた。赤みを帯びた背には白く浮かび上がる薔薇、傷ですら綺麗なんて、反則だ。

「ずるい」

「え？」

アスカはビクリと震えた。

「な、なにが？」

表情はその金髪で隠されて見えなかったが、わけがわからない、と行った様子だった。

「だって、こんな傷ができて、綺麗なんてずるいですよ」

「違う。まー私は傷なんてないけどねー」

マスターは傷一つ無いその肌が絹の着物でも着ているようで、綺麗だ。

「二人ともずるいです」

「私達、ずるいんだってさ、アスカ」

マスターはそう言ってアスカの額に、羽毛が触れるようなキスをした。

それはなんだか、友情でも愛情でもない、優しい感じがした。

「ナキリだって、そんなにもスマートじゃないか」

「あたしらにはない魅力だよねえ」

顔が熱くなるのを感じた。きっと今の私はアスカの比じゃないくらい赤いに違いない。

自分をそんな風に褒められたのは初めてだ。

いままでマスターと入ったお風呂は、親子の入浴、といった感じだった。

今日はなにがあった、明日はなにをしようか、そんな会話しかなかった。

それでも、十分に幸せで、温かいお風呂だったけど。

「ありがとうございます」

私は精一杯、平静を装って深々と頭を下げた。

見透かされてからかわれて、そんな調子で楽しい時間は過ぎていった。

マスターもアスカも、一言も明日について触れることはなかった。もちろん、今日のことについても。

「じゃ、ハカセ、お願いしますよ」

私達は例の山に向かって車の中。運転はハカセ。

車自体はハカセが増やしてしまったものだ。

朝方から緊張した空気が流れていた。朝食も黙々と、昨日の夜が嘘のように。

山に行くということ、全員が黒を基調とした服装になっている、どこの葬式かと思う。

マスターなんていつもの格好をまんま黒くしただけなのだから。

アパテイアから少し離れた山奥。少し、といっても車で一時間かかる場所だ。

地図で見る分には近く見えるのだけれど。

「超能力だとか儀式だとか、こんな身近にあっていいものなんでしょう」

こんな田舎の山奥で、神秘の欠片も残ってなさそうなのに。

「物事の本質なんてそんなものだ。側にあるのに気がついていないような事ばかりだ」

ハカセが素早く答える。まるでそんな質問は聞き飽きたというよ

うな表情をしている。

「リングが落ちるのに疑問を感じるか感じないか、そういうことだ」  
例え話まで流れるように、ため息まで、一セット。

「全員が呼び出されたのは、なぜだろうね」

アスカがここにいる全員の疑問を代弁した。

別段、自分だけ逃げたい、などという空気ではないのだが、やはり腑に落ちないのだろう。

それに、全員であるなら、何かしろ共通点があるはずなのだ。

タチバナと他の人間の繋がりは薄い。

繋がり、というなら、平等に繋がっているのは、マスターだろう。マスターだけでは駄目、ならば繋がりという観点はない。

「必要なものを一括りにしたらこの面子だったってだけじゃない？」  
マスターは考えているのか考えていないのか、上の空で景色を見ながら言った。

でも、それが一番、納得できるような気がした。

誰がどんな風に必要なのかは、わからないけど。

長ったらしい上り坂、歩いてくるとしたら途方もない。

曲がりくねった蛇の背、道路が舗装されているのが不思議でならない。

木々が道を外界から隠すように生え、薄暗い。障害物はなく、落ち葉が少しある程度だ。

「誰がこんな道通るんでしょね、山越えでもないでしょうに」

「まったくだな、神経を使う道だ」

ハカセが珍しく私に同意し、ぼやいている。

マスターとアスカは暢気に寝ているし、最後部においやられたタチバナは静かだ。

「ここまで連れてくるのがめんどくさかったから呼びつけたんじゃないかもしれないかと思える。もしかして呼び出した人物は深く考えず、単純な理由で呼んだんじゃないかとすら思える。」

「それもあるかもしれないが、それだけなら大したことではないだろ

う」

「どうしてですか？」

「願い事が叶うのに、車でちょっと手間が掛かるのを気にするか？」

「まあ、しないですね。それにしても、昼間に来て正解でしたね」

こんな狭い曲がりくねった道を夜走るなんて考えたくもない。

ハカセがどんなに運転が上手かったとしても。

「指定時刻よりも早ければ早いほど優位に立てる。これは交渉ごとの基本だ」

それは私にも理解できる。

逃げ場を知ることとで余裕が出来るし、相手の様子を観察することもあるからだ。

面識のない相手、特に今回のような超常の相手に対する場合は少しでも優位に立ちたい。

「それに、ココノエに干渉できる相手というのは問題だ。情報は多いほうがいい」

マスターがアスカとなにやら話していたあれだろう。

「確か、記憶をぶつけられたとか何とか」

「人は複数のことを同時に思い出すことはない。それを無理矢理思い出させてきたんだろう」

現実を認識する意識の層まで、記憶が浸食して、意識を失った、ということらしい。

「ココノエは自分である為のモノしか受け取らないから、ほぼ間違いないだろう」

自分の記憶なら、受け取らざるを得ない、不可侵には抵触しない。「難しい話ですね。超能力ってもっと自由なものだと思ってました」「そうでもないさ、結局は使う者に縛られる。言語的ではないにしろ、論理的なものだ」

分かれ道があり、どっちだ、とジェスチャーを交えながらハカセが続ける。

私は左を指差し、答える。

「発火能力であつたり、固有名称を伴う能力が限定的であるということが証明している」

「そこから発展したりする可能性はあるんですよね？」

「物質的な寿命がそれを許さないだろう。少なくともそれを超えたものを私は知らない」

能力の絶え間ない研鑽も、死によって無に帰る、ということだろうか。

確かに、子に受け継ぐ、ということが出来ない以上、無理はないだろう。

「でも、先に死なないっていう能力が発現したら、どうでしょうね」「それはわからないさ、む、ここじゃないのか？」

二股の分かれ道、山肌を進む道と火口のような盆地に続く道。盆地の中央には大きな湖が見える。

「あんな湖、地図にはないんですけどね」

「サイズの問題か、それとも別の問題か、まあ後者だろうな」しかし、盆地までの下り坂で舗装は途切れており、建物なども見当たらなかった。

辺りは背の高い木が疎らに生え、雑草がところどころ密集している。

湖の側に、ここからでもはっきりと見える程大きな樹がある。

「あの樹、大きいですね」

「死臭がする。あの樹、死体がぶら下がってるな」

寝起きにこの臭いはきつい、と不機嫌な顔でアスカが車から降りてくる。

「ははっ、アスカ、犬みたいだね。んーっ」

マスターも降りてきて背伸びをする。タチバナは相変わらず静かに立っている。

「じゃ、行こうか」

マスターが先頭に立ち、アスカが続く。山の中には地肌が見えていて歩きやすい。



ウーッフホッホッホ、ウーッフホッホッホ……。

木菟の声が辺りに木霊し、方向感覚を乱す。

木々の影が地面に不思議な模様を作り、とても森林浴、などとは言えない雰囲気だ。

木陰の空気はひんやりとしていて、日光で暖まった体を幽霊のように撫でる。

不意に首筋に触れた木の葉が私を驚かせた。

しかし、何よりも私を驚かせたのはタチバナだった。

まるで道を知っているかのような足運びで、何度も私が転けるのを助けてきた。

おかげでインバネスが汚れずに助かっている。

私は木の根や、絡まった草に足をとられたが、全て手を握って支えてくれたのだ。

「今日は夢を見たわけではないのですが、なんとなくわかります」  
タチバナは、私達が確信するのと同じように、わかるのだろう。

「ただ、ほんの少し先のことだけ、ですけど」

ハカセはこれからの展開でも考えているのだろう。黙々と歩いている。

マスターとアスカは森林浴気分で騒いでいる。

この二人の図太さはなんだろう。こんなことなど日常茶飯事といった風に見える。

「もしかして、こんなことってよくあることですか？」

「まあね。もともと私らがいたところが喧嘩ふっかけてきてるわけだし」

鼻歌交じりのマスターから答えが返ってくる。

知っているからこそその余裕、これくらいなければ優位には立てないのだろう。

もっとも、マスターは半分安全だっという安心感があるのだろうが。

私のような一般人は隅で怯えているのがお似合いなのだろう。

「うあっ」

蜘蛛の巣が髪について思わず声を上げる。視線を集めるのがちょっと気まずい。

マスターやアスカはくすつと笑うのだけれど、ハカセはジッと射るような視線を感じるのだ。

「はい、とれましたよ」

例によってタチバナは私のフォローを続けている。

「ありがと、贅沢なんだけど、なにか起こる前については……無理？」

「難しいですね。心の準備が出来てるだけ、みたいなものなんで」

「ふむ、しゃがめ。池が見える」

ハカセが私達の頭を押さえつける。マスターとアスカは既に木の陰に隠れている。

「アスカ、どんな感じ？」

「死臭が酷い。湖の側のでかい樹には寄らない方が良さそうだ」  
アスカが一瞬だけ目を閉じ、続ける。

「人の気配はないな、とりあえずは問題ない、ハカセ、どうします？」

「湖を一周する。夜になれば地形は見えないが、ある程度知っておいたほうが良い」

「わかりました。では行きます」

さっきまでの緩みきった空気は消え、先頭の二人の神経が尖っているのが伝わってくる。

木菟の鳴き声が消えた。

澄み切った静寂は鼓膜に疼くように響く。

湖の周りに思っていたような起伏や危険だと思われる場所はないかった。

開発されていれば、それなりの観光地になりえたのではないかと思えるほどだ。

私達は湖の隣の樹周辺が見渡せる場所に陣取って座り込んだ。

大きな樹の周りはその根が所々隆起し、露わになっている。

木々はそこを避けるように生え、円形のステージのようだ。

「今のうちに休んでおけ、時間は思うほど残っていない」

ハカセが食料や、夜間必要な装備を取り出した。なにもない空間から。

「ほんと、一歩間違えば全能ですね」

アスカも言っていたが、私もつい、口にしてしまった。

「いいから寝ている、私達が交代して周りを見るから」

そう言っただけで無理矢理寝かしつけられる。虫除けまで振ってくれて、  
久々の運動で疲れていたのか、瞼を閉じるとすぐに眠くなってしまった。

「起きろ、日没だ」

ハカセが私の肩を揺する。

辺りは薄暗く、太陽が沈みきる直前のようなだった。

昼間見た森の面影はなく、幽霊でも出てきそうな空気が漂っている。

空気は冷え、時折吹く風に木々が囁きあう。森が一つの集落であるかのようだ。

「こんな薄気味悪い森だったんですね。昼間はあんなに綺麗だったのに」

「仕方ないさ、森なんてどこもそんなもんだ、それより動物がいなの  
の気がなるな」

アスカはまた感覚を尖らせているのだろう。ゆっくりと周囲を見回している。

「私達が来たから隠れちゃったんじゃないですか？」

「いや、ここに来たときから、この湖の周りには動物はいなかった」  
ここは山の中なのに、動物がいらない？ あの木菟の声は？

「でも、木菟は鳴いてましたよね？」

「だからおかしいんだよ。ハカセ、どう思いますか？」

アスカが促す。ヘッドライトやらを装着し終わり、ハカセがやっと口を開く。

「ここは同じだが違う場所だ。私達に移ったのは恐らく日没のタイミングだろう」

「その根拠は？」

マスターがリングを囁りながら言った。

「日没からここは澄んでいる。私はもう普通の人間と大差ない」

「なるほど、確かにそれは明確な理由だね」

リングの芯を投げ捨てながらマスターが頷いた。

「まあ、これで小細工もできなくなったわけだ。逃げ場もなくなっちゃったし」

そう言って、右手で頭をかきながらマスターが歩き出した。

「それもそうだな、ほら、いくぞ」

ハカセも諦めたように歩き出す。

私達もそれに続く。ヘッドライトを付けた隊列は、どこかの探検隊のようにも見える。

大樹の側には誰もいない。明かりも見当たらない。

「誰もいませんね……」

口を開いたのはタチバナだった。その口調は、それが意外だという風に聞こえた。

恐らく、今日の確信からいくと、必ず、そこには誰かいるはずだったのだろう。

しかし、マグライトで辺りを照らしてみても、揺れる木々の影が怪しく見えるばかりだ。

「おやおや、皆さん、早いお着きで、歓迎しますよ」

大樹の幹に寄り掛かるように男は立っていた。

全員が確信していたのか、同時にそれを見つけ、誰も驚かなかった。

目深に被ったキャスケット、ここから表情を知ることとは出来ない。

周囲に威圧感を与えるような黒いアルスターコートが印象的だ。

「しかし、ライトが眩しいですね」

言って男はポケットから小瓶を取り出し、中身をぶちまけた。

湖の周りの地面が光りだした。蛍光灯の光を少し青くしたような、明るいくど暗い光。

「私のことは、そうですね、アペイロン、とても名乗っておきましようか」

「神様気取りの人間が好きそうな名前だな」

ハカセが噛みつく。余裕が見られない、表情に不快感が見える。

まるで、気安く、その名前を使われるのが我慢ならない、といった風に。

「で、どんな用事があって私らを呼び出した？ ミスターアペイロン」

マスターは足を肩幅ほどひらき、腕組みをして言った。

「性急ですね。貴方も、生け贄ですよ。わかっていたはずですが、

アスカ・シニフェ」

アスカにはわかっていた。確かに説明は受けていた。儀式の模倣。しかし、それが自分に関わることだとは思ってもいなかったはずだ。

「いけない！」

アスカが飛びかかろうとするところをタチバナが押さえつけた。

タチバナの力で押さえられるわけではないが、それを振り切るのに躊躇したのだ。

「君もわかってきたようですね、タチバナ君、少し遅いが」

タチバナの腕の中で、アスカがふらついて倒れた。

「記憶というのは酷く凶暴なものでね。現実を曲げることに全力を尽くしたりするのだよ」

タチバナも、ハカセも、同様に、膝を折って倒れた。

「ココノエ、君には生きたまま湖に沈んでもらう」

「それが私である必要はなんだい？ それくらい教えてくれてもいい

いだろ？」

マスターの肩から力が抜ける。時間稼ぎとか、チャンスを狙っているようには見えない。

それはどこか諦めに似た、死を前にした覚悟のような弛緩。苛々する。苛々している。それを見ている自分がいる。

「それは君が独りだからだ。二十六歳の九重権は、この上なく独りだからだ」

わけがわからない。胸の中でなにかが燃えているような感じがする。

「全てを記憶した銀盤で踊りながら、記憶にすら残らない程、独りだからだ」

なにを言っているんだ。いや、聞き取れていないのは私のせいかな？「完全に独りだからだ。唯一無二の生け贄というわけだ」

五月蠅い、もう黙れ。生け贄なんて数え切れないほどいたはずだ。「完璧な生け贄だから、か。でも、なんでなっちゃんは起きてるんだい？」

マスターが私を見る。不思議そうに、不安そうに、なにより心配そうに。

「なっちゃんに触ったら、ただじゃすまないよ」

アペイロンは笑った。乾いた、酷く乾いた笑いだった。

髪の毛がざわつく、体が熱い、そろそろ我慢の限界だ。いったいなんの？

「彼女には触れられないさ、触れられるのは君だけだ、おやすみなさい、九重権」

マスターが膝を折って倒れる。美しい服が、その顔が、土を被る。そこが限界だったらしい。

私はマグライトで殴りかかっていた。

体が勝手に動いているような気がする。

冷静ないつもの私は見ているだけ。

赤く、熱く、もやもやしたものが私の体を動かしている。

ああ、ワタシはこの男に怒っている。

脳天を砕くように上から下へ、しかしそれは空を切った。

なぎ払う、当たらない。

アペイロンはゆらりゆらりと、柳に風、という言葉を連想させる。

「まだ足りないか」

ワタシが後ろ向きに吹き飛ぶ、天地が逆転するのを三度ほど見届けてから仰向けに倒れた。

「私は全能ではないが、こういうこともできるのだよ」

マスターを除く三人の体が浮かぶ、念力の類だろうか。

ワタシが体を起こす。痛い。頭が疼く。涙が流れた。

三人の体が、大樹の枝に、はやにえのように突き刺さった。

丁度胸を突き刺すように、赤い液体が滴っているのがわかる。

見上げたそこには、赤い服の、頭のない女の死体や、黒いコートを着た男の死体があった。

人だけでなく、馬や、鳥や、犬など、様々な動物の死体が、枝を埋め尽くしている。

水音が聞こえた。大きな、なにかが湖面に叩きつけられる音が。

マスターがいない。アペイロンはにやついている。

不快だ。口の中が苦い。

ワタシは声にならない叫び声をあげていた。

体の後ろからなにかが流れ込むような感覚。目眩、視界は暗く。

意識は鮮明だ。いくつもの記憶が混ざり合ったものが見える。

私のものではない、見たことのない景色も、感じたことのない感情も、混ざり合っている。

いろいろな思考が、明確にそれのものとわかる思考が、流れ込んでくる。

全ての思考が、明確でないのは、ワタシの気持ちだけだ。

「これが渦の再現、これでこそ報われるというものだ」

なにを言っている。報い、ああ、報いを受けるがいい。

ワタシは叫ぶのを止めた。

静かに。

真剣に。

憎みながら。

消えろと願った。

「ああ、これが、全ての波の渦」

ワタシは呟く。

アペイロンが存在する空間が縮んでいく。やがて極小を通り過ぎて消滅するのだろう。

「あとは好きにするがいい。もう、この世界に用はない」

アペイロンは言い放つ、そんなこと、聞かなくてもわかっている。なにやら色々なモノが流れ込みすぎて、どうやらワタシは、全てになってしまったらしい。

「おはようございます」

「ああ、なっちゃん、今日は早いね」

今日は早く目が覚めた。どうせだからコーヒーでも淹れてあげようと思ったのだ。

苦く、苦く、とても苦い、目の覚めるようなコーヒー。

夢なら、覚めるだろう、と。

「うへっ、なっちゃんこれ」

マスターが苦い、を表情で表せる限界に迫るほど表現してくれた。「ふふっおはようございます」



「たしかに、目は覚めたけどね」  
マスターが少し涙目になった。

「すいません。今日はそんな気分だったんです」  
今日はA p a t h e i aはお休み。その代わり、ちょっとしたパ  
ーティがあるのだ。

私がここに来た日。いわば私の誕生日だ。

ハカセとアスカ、タチバナが遅れてやってきた。

ケーキを食べて、コーヒーを飲んで、少しだけ昔の話をして。

少し前とは、少し違う、日常が戻ってきた。

そういえば、と、マスターは言う。

「なっちゃんは何で黒が好きなの？」

私は迷わず答えた。

「全部混ざって、真っ黒だからです。私の色なんですよ」

その答えに、全員が笑った。もちろん私も。

あの騒ぎの後、どんなことがあって今を過ごしているとか、アペ  
イロンが探している女のこととか、どうしてワタシがあんな存在に  
なったかとか、いろいろなことは、私とワタシだけが知っている。  
でも、私達の日常にそんなことは必要ないから、語ることはない  
と思っている。

**(後書き)**

読んでいただけたのなら幸いです。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n8456o/>

---

世界はスベテそのように

2010年11月11日07時47分発行